

業務資料 No.516

ケベック州 移住者動態調査

昭和54年2月

国際協力事業団

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY

1
4
E
IRY

移工移
J R
79-2

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 3. 10	801
	23.4
登録No. 00477	EII

は し が き

カナダ移住は、その特質として、アン・スポンサード方式（自主申請）移住が挙げられ、これまで、その方式により多くの移住者が渡加した。しかしながら移住者の実態をとらえることは、甚だ困難なことであるが、それ故により明確にそれら移住者の実態を把握し移住希望者に対する確かなカナダ移住資料を提供する必要がある。

このため昭和47年度より、オンタリオ州、ブリティッシュ・コロンビア州、ケベック州・平原三州（マニトバ州、サスカチュワン州、アルバータ州）を対象地区として移住者動態調査を実施してきた。

今回調査を実施したケベック州には、日系人が約1,800人居住している（1971年のカナダ国勢調査）と云われており、動態調査は今回で2回めの実施であるが、オンタリオ州、ブリティッシュ・コロンビア州等の日本人移住者が集中している州から比較すると、日系人数は非常に少ない。

又、カナダ国10州の中においてもフランス文化の漂う特色のある地域である。

カナダという広大な国土に散在する日本人移住者の共通点、生活状況など、これまで実施した他の州の日本人移住者の実態と比較して活用願えれば幸いである。

最後に、本調査にご協力下さったカナダ移住協力員、移住者連絡協議会等関係各位に対し、ここに謹んで感謝の意を表する次第である。

昭和54年2月

国際協力事業団

移住国内事業部長

JICA LIBRARY



1035592[3]

目 次

I 調査の概要	1
1 調査の方法	1
2 分類集計の方法	1
3 アンケート回答者の傾向	1
II ケベック州の概要	8
III 調査結果の集計	10
A. 共 通	10
B. 独立自営者	57
IV 調査結果の考察	58
1. 全 体 像	58
2. 前回のケベック州調査との比較	58
3. ブリティッシュ・コロンビア州との比較	58

I 調査の概要

1. 調査の方法

- (1) 本調査は、1977年12月から1978年3月までの4カ月間に行なった。
- (2) 当事業団トロント駐在員事務所を通じ、一定の調査用紙（アンケート方式、後記様式）をケベック州在住の日本人移住者（戦後移住者）に郵送で配布し、回収した。
- (3) 標本抽出の方法は無作為抽出方式をとった。
- (4) 抽出源は、移住協力員、新移住者の会、隣組組織、ランゲージエイド、宗教団体の会員、相談訪問者、電話帳、総領事館資料（在留届、婚姻届、出生届）、その他スポーツ、趣味、交友等多種多様なグループである。
- (5) 調査件数

	(今回)	(前回)
○ 調査用紙配布総数	210部	108部
○ 有効回収部数	74部	54部
○ 無効回収部数	3部	1部
○ 有効回収率	35.2%	50%

2. 分類集計の方法

本調査はケベック州移住者を対象としたもので52年度のブリティッシュ・コロンビア州（以下B・C州）移住者の調査及び49年度に行なったケベック州の前回調査との比較検討のため、アンケート様式はできる限り同一とした。ただ今回は、移住者がカナダ社会に適応、定着する上でしばしば障害となる三点一移住当初の就労と生活、結婚、子弟の日本語教育一をより深く調査する目的から質問事項を増やしている。また、独立自営者の事例が増加していることから、独立自営のためのアンケート欄を別に設定し、考察を加えた。

分類集計にあたっては、従前と同様の方法を取り、他州移住者との類似点をみることにより、日本人移住者の傾向を把握し、差異点をみることにより、カナダ国内での地域差からくる移住者の生活の差を明確にするよう努めた。アンケート項目によっては、単純集計のみにとどまらず、職種別、未既婚別、在加年数別等、質問事項に応じ多角的な集計分析を行なった。

3. アンケート回答者の傾向

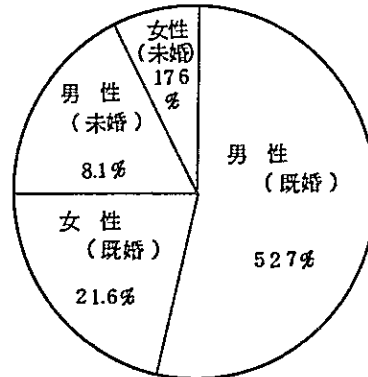
今回の調査において、有効回収者74件においてみると男女別では男性60.8%、女性39.2%。年齢別では31～35才が33.7%を占めている。在加年数は7年以上が52.7%、5年以上の者を含めると71.6%となっている。学歴別では大卒（短大卒含む）67.5%と半数以上を占めている。既婚者家族構成は、夫婦のみ、または子供1～2名が48.6%と多く、未婚者と既婚者の割合では、未婚者が25.7%、既婚者74.3%となっている。職種別では、専門技術者・特殊技能者が44.6%、次いで事務系従事者が21.6%となっている。それぞれ

の内訳は次表の通りである。

なお、前回のケベック州と比較すると、既婚者が多くなり、在加年数も高くなっているが、反面、年齢と既婚者の家族構成においては、相当の差が生じており、調査対象者は前回と比し、回答者の新旧交代が多くなっていることが窺える。

区 分	今 回 調 査		前 回 調 査	
男 女 別	男	60.8%	男	70.3%
年 令 別	26～35才	54.0%	26～35才	77.8%
未 既 婚 別	未 婚	25.7%	未 婚	35.2%
在 加 年 数 別	3 年 以 上	85.1%	3 年 以 上	75.0%
既婚者家族構成別	夫婦のみ子供1～2名	48.6%	夫婦のみ子供1～2名	76.4%

表1 未・既婚、性、年齢別

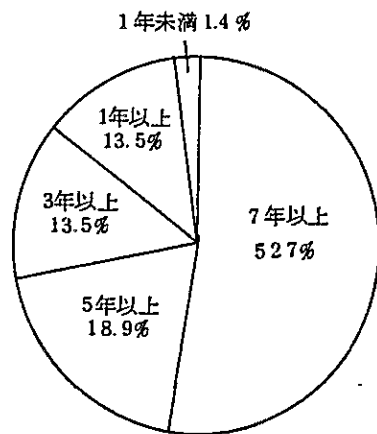


未既婚・性・年齢別

性別 未既婚 年 令	男				女				総 計
	未	既	未記入	計	未	既	未記入	計	
20才以下									
21～25	1	1		2 (4.4)	2			2 (19)	4 (5.4)
26～30	4	4		8 (17.8)	3	4		7 (24.1)	15 (20.3)
31～35	1	13		14 (31.1)	4	7		11 (37.9)	25 (33.7)
36～40		10		10 (22.2)	3	2		5 (17.3)	15 (20.3)
41才以上		11		11 (24.5)	1	3		4 (13.8)	15 (20.3)
計	6 (8.1)	39 (52.7)		45 (60.8)	13 (17.6)	16 (21.6)		29 (39.2)	74 (100.0)

在加年数，性別

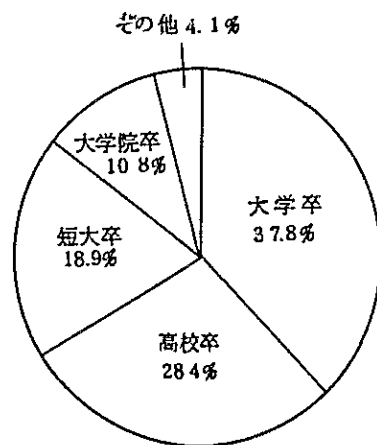
表 2 在加年数，性別



性別 在加年数	男	女	総計
7年以上	29	10	39 (52.7)
5年以上	9	5	14 (18.9)
3年以上	3	7	10 (13.5)
1年以上	3	7	10 (13.5)
1年未満	1		1 (1.4)
未記入			
合計	45	29	74 (1000)

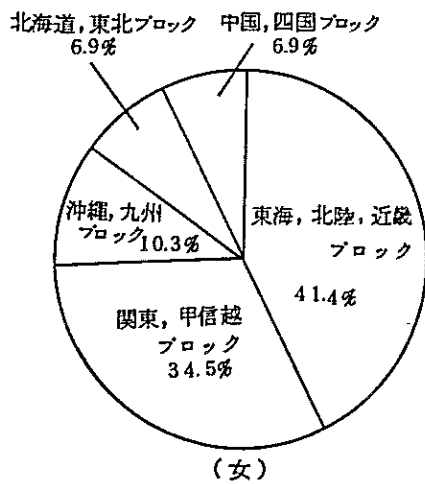
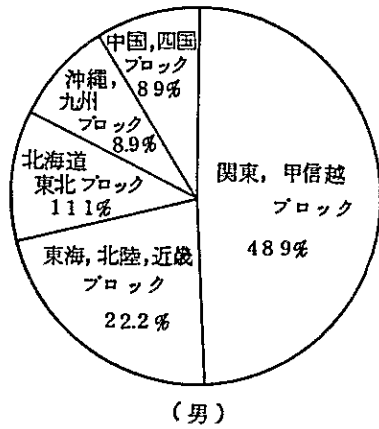
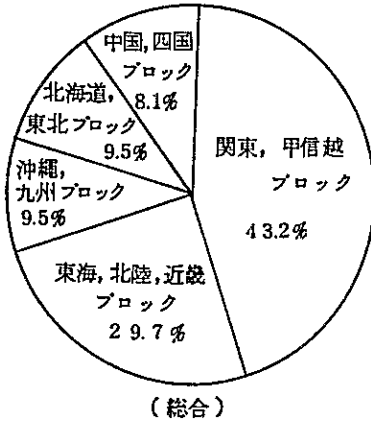
最終学歴・性別

表 3. 最終学歴，性別



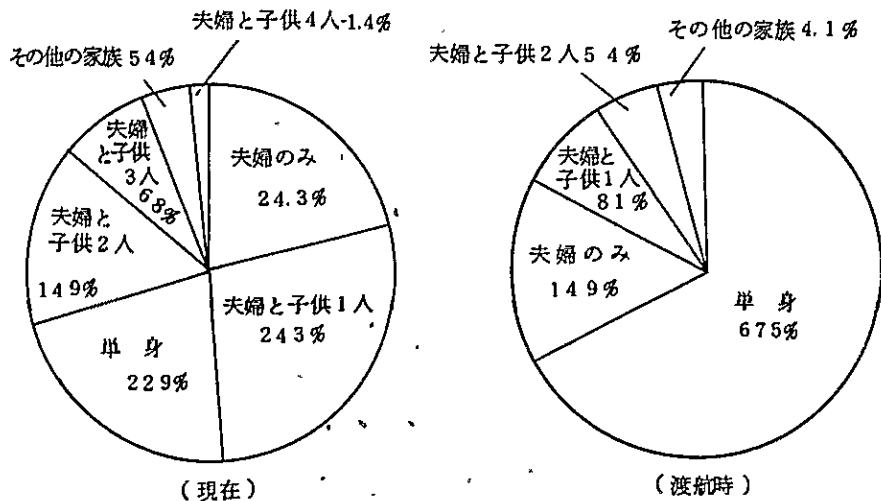
性別 学歴	男	女	総計
大学院卒	8		8 (10.8)
大学卒	19	9	28 (37.8)
短大卒	2	12	14 (18.9)
高校卒	13	8	21 (28.4)
中学卒			
その他	3		3 (4.1)
未記入			
計	45	29	74 (1000)

表4 出身県，性別



出身県	性別	
	男	女
北海道	1	2
青森		
岩手	1	
宮城	2	
秋田		
山形	1	
福島		
新潟	1	
茨城		
栃木		
群馬		
埼玉	1	
千葉	2	
東京	15	9
山梨		
長野	2	
神奈川	1	1
静岡		
富山		1
石川	1	
岐阜		
愛知	1	1
三重		
福井		
滋賀		
京都	4	2
大阪	2	5
奈良		
和歌山	1	
兵庫	1	3
鳥取		
岡山		1
島根	2	1
広島	1	
山口		
徳島		
香川		
愛媛	1	
高知		
福岡	1	1
佐賀		
長崎		1
熊本	1	
大分	1	
宮崎		
鹿児島		1
沖縄		
未記入	1	
合計	45	29

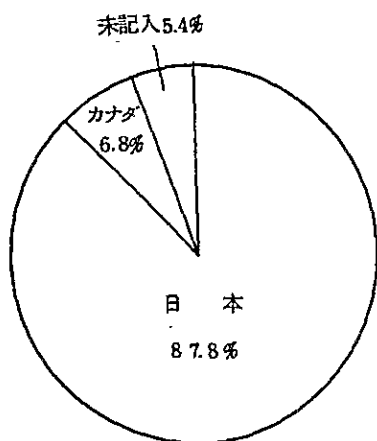
表5. 既婚者家族構成, 性別



家 族 構 成

性別 家族構成	現 在			渡 航 時		
	男	女	計	男	女	計
単 身	6	11	17 (22.9)	30	20	50 (67.5)
夫 婦 の み	14	4	18 (24.3)	5	6	11 (14.9)
夫 婦 と 子 供 1 人	13	5	18 (24.3)	4	2	6 (8.1)
夫 婦 と 子 供 2 人	6	5	11 (14.9)	4		4 (5.4)
夫 婦 と 子 供 3 人	4	1	5 (6.8)			
夫 婦 と 子 供 4 人		1	1 (1.4)			
そ の 他 の 家 族	2	2	4 (5.4)	2	1	3 (4.1)
未 記 入						
計	45 (60.8)	29 (39.2)	74 (100.0)	45	29	74 (100.0)

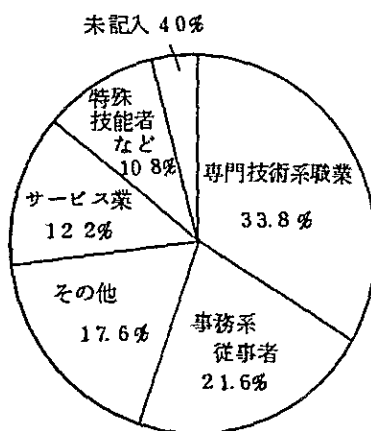
表6 国籍，性別



国籍，性別

国籍	性別		総計
	男	女	
日本	40	25	65 (87.8)
カナダ	2	3	5 (6.8)
その他			
未記入	3	1	4 (5.4)
合計	45	29	74 (100)

表7 職業別，性別



職業別，性別

職業別	性別		性別		総計
	男		女		
	人数	%	人数	%	
1. 農・林・漁業従事者	0	0	0	0	0
2. 事務系従事者	8	(17.8)	8	(27.6)	16 (21.6)
3. 専門・技術系職業	19	(42.2)	6	(20.7)	25 (33.8)
4. 特殊技能者など	8	(17.8)			8 (10.8)
5. サービス業	7	(15.6)	2	(6.9)	9 (12.2)
6. その他	1	(2.2)	12	(41.4)	13 (17.6)
未記入	2	(4.4)	1	(3.4)	3 (4.0)
計	45	(100.0)	29	(100)	74 (100.0)

職業別分類については次のとおりとした。

1. 農・林・漁業従事者

農業，園芸，畜産，林業，漁業，造園，庭師，雑鑑別およびこれらの経営者

2. 事務系従事者

公務員，司書，計理士，秘書，事務員，システム・アナリスト，コンピューター・プログラマー，キー・パンチャー，タイピスト，テレックス・オペレーター，貿易業務，海運業務，経営コンサルタントおよびこれらの経営者

3. 専門・技術系職業

(1) 技術的従事者

(2) 教授および教師

(3) 医療関係従事者

機械技術者，電気・電子技術者，電信技術者，化学技術者，生産管理技術者，工業デザイナー，建築技術者，教授，教師，薬剤師，歯科技工士，看護婦，ソーシャル・ワーカーおよびこれらの経営者

4. 特殊技能者など

金型工，木型工，鋳物工，溶接工，機械工，板金工，自動車整備，自動車塗装，印刷工，工場労働者，建築塗装，大工，製パン，製菓，デザイナー，イラストレーターおよびこれらの経営者

5. サービス業

小売業，レストラン，ホテル，理容師，美容師，調理師，ウェイター，ウェイトレス，旅行業，家政婦，通訳およびこれらの経営者

6. その他

学生，聖職，主婦，無職

Ⅱ ケベック州概要

広大な国土を有し、多民族国家を形成しているカナダ、その中でもケベック州はフランス系が8割以上を占める程で他の州に較べて特色がある。ケベック州は、カナダ東部の州で面積は154万平方キロ（日本の約4.2倍）でカナダ10州の中では最大であり、人口も600万人を越し、オンタリオ州に次いで第2位の重要な州である。

セント・ローレンス河口から、1,160キロにわたり、主として、同河の北岸にひろがる広大な地域を占め、ラブラドル半島西部を占める州面積の $\frac{3}{5}$ にあたる北部は住民が少なく、南部のセントローレンス河の大動脈沿いに人口が集中している。

ローレンシア高原とガスペ半島の山地を除いて土地は低平で酪農が盛んなほか、鉱業、漁業、パルプ、製紙業が重要産業である。

カナダの鉱業は、アメリカ合衆国と同じように地下資源に恵まれ、とくにローレンシア楯状地は資源の豊庫といわれており、ニッケル、銀は世界産額で第1位、金と白金は第3位を占めるが、ケベック州においても、鉄、ニッケル、金、ウラニウム等の地下資源は豊富である。又、カナダの中でも、とくに湖、沼が多く推定では100万の湖沼があるといわれている。そのかかえた水資源は日本などの想像をはるかに超える。

ケベック州で最も大きい都市のモントリオール市は人口約200万人。カナダ全体では、トロント市に次ぐ第二の都市で、産業、経済、政治を左右する力を持ち、住民の $\frac{2}{3}$ がフランス語を使用し、フランスのバリエに次いで世界第2のフランス語都市である。

1976年には、同市でオリンピックが開催されたことは記憶にまだ新しい。

同市は、セント・ローレンス河の中流でオタワ河の合流点にあり、工業（繊維、製靴等の軽工業）、貿易、金融の中心地として発展し、オタワ河によって、連邦の首都オタワ市とも結ばれており、内陸五大湖沿岸にあるトロント市をはじめとする工業地帯との連絡もセント・ローレンス河によって可能である。

同州の気温は大陸性気候で、冬は長く気温も零下10℃～20℃の日がめずらしくない。北部の平均気温は冬季で零下12.2℃、夏季で12.8℃、南部では冬季零下9.4℃、夏季18.3℃である。

10月末には降雪があり、5月はじめまで雪は残る。雪はあっても気温が低すぎて結氷してしまふためか、湿った感じはない。

春、秋は短かく、1カ月程度である。モントリオール市の場合で、平均気温は1月が零下9.4℃（最低零下13℃、最高零下5℃）、7月は21.1℃（最低17℃、最高26℃）である。

降雪量は多く、年間降雪量2560mmである。

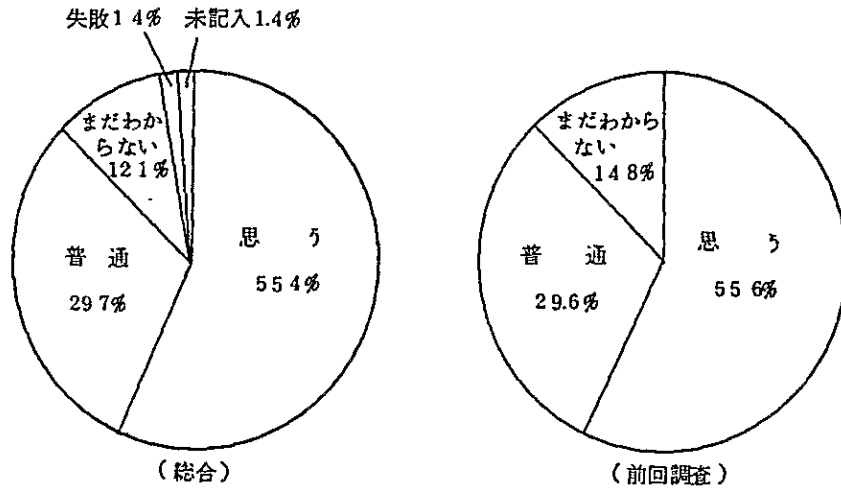
歴史では、カナダの中で、最も古く、その起源は1534年にジャック・カルチエにより発見されたと云われているが、カナダ領土はイギリスとフランスの植民地抗争が長く続き、1759年イギリス軍によるケベック攻略をもって終わり、イギリス領カナダの統治下に入った。その後抗争は続いたが、現在でもケベック州の独立意識は根強い。

州都はケベック市であるが、現在のケベック州はフランス植民地時代からの保守的なカトリック宣教のものが多く、その影響が町のたたずまいや風俗にもあらわれている。一国の中にケベック州のように他の部分とは全く異なった言葉を話し、宗教や習慣もそれに応じて別のものを持っているグループが存在し、しかも全体としてカナダという統一体を作っている現象は、単一民族の日本人には大きな驚きといえよう。

Ⅲ 調査結果の集計

A 共通

1 カナダに移住してよかったですか（在加年数、性別）



区分	性別		男 性						女 性						総計		
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満		未記入	計
A. 思う			13	8	1		1		23 (51.1)	7	3	4	4			18 (62.0)	41 (55.4)
B. 普通			10	1	1	2			14 (31.1)	3	2	1	2			8 (27.6)	22 (29.7)
C. まだわからない			5		1	1			7 (15.6)			2				2 (6.9)	9 (12.1)
D. 失敗			1						1 (2.2)								1 (1.4)
E. 未記入													1			1 (3.5)	1 (1.4)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

「移住してよかったと思う」と回答した者が55.4%と最も多く、次いで普通29.7%と回答しており、全体の85.1%を占める。失敗であったと考える者は僅か1.4%にすぎない。在加年数が長くなるほど移住してよかったと回答するものが顕著に表われており、在加年数5年以上で移住してよかったと思う者は58.5%ある。

この項では、1年未満の者の傾向をもっと調査してみたかったが、アンケート回答者中1名だけの為に比較は困難であった。

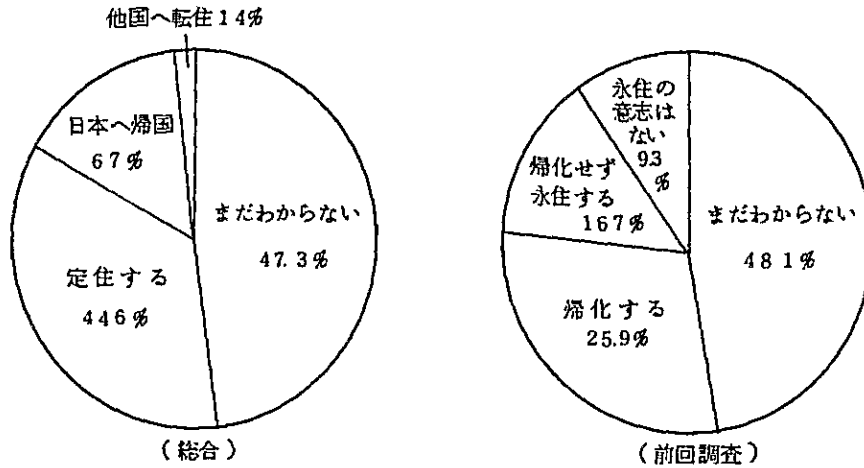
在加年数3年以上でまだわからないと回答した者が12.7%ある。

男女別では、移住してよかったと思う者が男性51.1%に対し、女性は62.0%で男性よりも多い。また、まだわからないという慎重派は男性に多い。

前回の調査と比較し、ほぼ同じ回答率であるが、カナダ国内は世界不況のあおりからインフレが昂進し、生活費の暴騰、失業者の増加、また、ケベック州においては連邦政府からの分離問題による、英語使用の禁止、子供の英語系学校の入学禁止（特殊環境の者を除き）などカナダ国内でも論議が余儀なくされており、この時期に移住した日本人は失敗と考える者ももっと多いと予想したが、1%台と少ないことは、大多数の者がカナダに移住して満足していると考察され、カナダ移住を考える上で喜ばしいことである。

「移住してよかったと思う」と回答した職種別内訳は、事務系が93.0%の多くを占めており、専門、技術系職業の者は80.0%である。

2. カナダに定住しますか(性別、在加年数別)



区分	性別		男 性						女 性						総 計		
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満		未記入	計
A. 定住する			11	5			1		17 (37.8)	6	4	3	3			16 (55.2)	33 (44.6)
B. まだわからない			16	3	2	2			23 (51.1)	4	1	3	4			12 (41.4)	35 (47.3)
C. 他国へ転住			1						1 (2.2)								1 (1.4)
D. 日本へ帰国			1	1	1	1			4 (8.9)			1				1 (3.4)	5 (6.7)
E. 未記入																	
合 計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

定住する考えのある者は44.6%と半数を下回っており、移住してよかったと考える者の比率より10.8%低い。

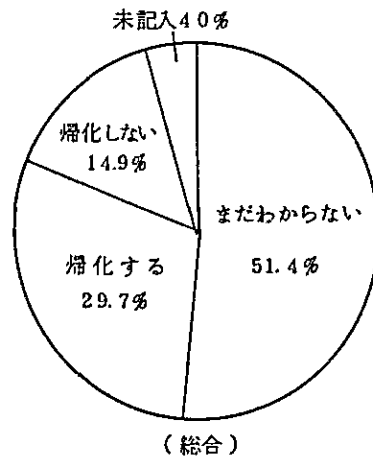
在加年数別では5年以上の者49.0%が定住すると回答しており、カナダ社会に定着してゆく過程が明確にうかがわれる。性別では女性の方に多い。

日本へ帰国、他国へ転住すると回答した者は8.1%と少なく、特に他国への転住を考えている者は男性1名だけにすぎない。

しかし、まだわからないと答えた者が47.3%とこの調査では1位を占めており、慎重の故か、考えていないのかこの調査では不明であるが、在加年数5年以上の者が45.2%もあり、特に男性においては50.0%の回答者があることは考えさせられる。

前回の調査と比較して同様の傾向を示している。

3 カナダに帰化しますか（性別、在加年数別）



区分	性別		男 性						女 性						総計		
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満		未記入	計
A. 帰化する			10	3			1		14 (31.1)	5		3				8 (27.6)	22 (29.7)
B. まだわからない			12	4	3	1			20 (44.5)	5	5	3	5			18 (62.1)	38 (51.4)
C. 帰化しない			5	2		2			9 (20.0)				2			2 (6.9)	11 (14.9)
D. 未記入			2						2 (4.4)			1				1 (3.4)	3 (4.0)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

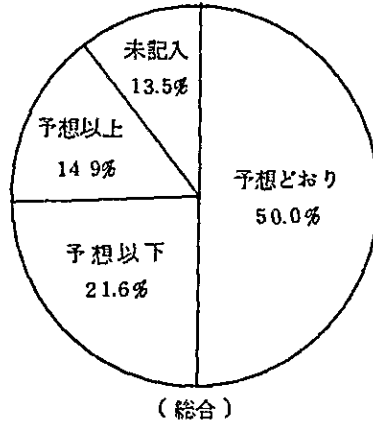
まだわからない51.4%、次いで帰化する29.7%、帰化しない14.9%の順である。帰化する29.7%の中には既に帰化した者も相当含まれるが、職種別では、男性が専門、技術系職業、事務系従事者、次いで特殊技能者の順である。女性では主婦、事務系従事者に多い。性別では大きな差異はみられない。

2の設問で定住すると回答した者44.6%と比較した場合、帰化する者は多いとは云えないが、これは先の見通しに自信をもって答えられない面があるのであろう。

しかし、前回の調査では25.9%の者が帰化すると回答しており、今回の調査と比較すると暫時増加の傾向にはある。

特徴としては、在加年数5年以上の者でまだわからないと回答した者が全体の半数を占めていることが注目される。

4. カナダは期待どおりでしたか（性別、職業別）



区分	性別		男								女								総計
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	
A. 予想以上				2	2	1	1	1		7 (15.6)		3					1	4 (13.8)	11 (14.9)
B. 予想どおり			4	11	5	3			2	25 (55.5)		2	3		1	6		12 (41.4)	37 (50.0)
C. 予想以下				1	3		3			7 (15.6)		2	1		1	5		9 (31.0)	16 (21.6)
D. 未記入				1	3	2				6 (13.3)		1	2			1		4 (13.8)	10 (13.5)
計				8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

この設問は、今回新たに設けたものであるが、渡加前にはややもすると期待が多くなりがちであり、実情調査を怠ったり誤解する事例が少なくない。設問自体が一般的あるいは、あいまいに過ぎ、未記入者が多くなると予想されたが13.5%と低く、調査には協力的であった。

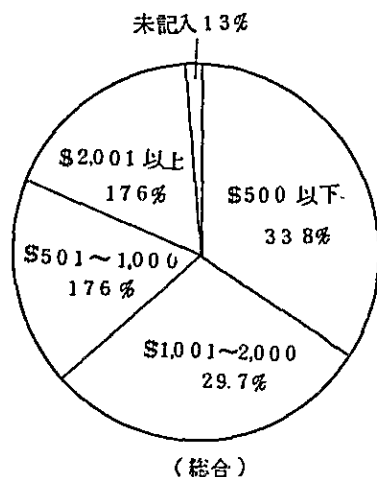
未記入者を除いた割合は、「予想どおり」と答えたもの57.8%、「予想以下」と答えた者が25.0%で4人に1人は「予想以下」と考えている。「予想以上」と答えた者は17.2%ある。

移住するに際しては、日本国内においてカナダ国の事情を十分研究し、渡加した者が多いと思われるが、言語、風俗、習慣の違う社会で「予想どおり」と「予想以上」をあわせると75.0%に達し妥当のところと云えよう。

職種別では、各人の生活価値観等の違いからこの調査では一概に云える性質のものでないが参考までに、「予想どおり」「予想以上」と回答した者は、男性では特殊技能者、事務系従事者、専門、技術系職業の順となっている。女性では専門、技術系職業、事務系従事者、その他の順である。

予想以下との回答者の傾向をみると、移住の動機がただ何となく等、確固たる目的の無い人に多い。

6. 渡航時の携行金はどの位でしたか(性別、未既婚別)



区分	性別		未既婚別				総計
	男	女	未	既	未記入	計	
A. \$ 500 以下	2	3	17	3		19 (42.2)	25 (33.8)
B. \$ 501~1,000	2	5	3	3		5 (11.1)	13 (17.6)
C. \$1,001~2,000	2	2	11	7		13 (28.9)	22 (29.7)
D. \$2,001 以上		2	8	3		8 (17.8)	13 (17.6)
E. 未 記 入		1					1 (1.3)
合 計	6	13	39	16		45 (100.0)	74 (100.0)

在加年数7年以上の者が52.7%の割合を占めるが、日本の経済は1973年のオイル危機以来、賃金、物価の上昇が著しく高騰し、オイル危機以前に渡加した者と現在とでは数字の上において相当の差異がある。また、カナダ国においても物価上昇があるので本表に出ている数字は一応の目安と考えることが必要である。

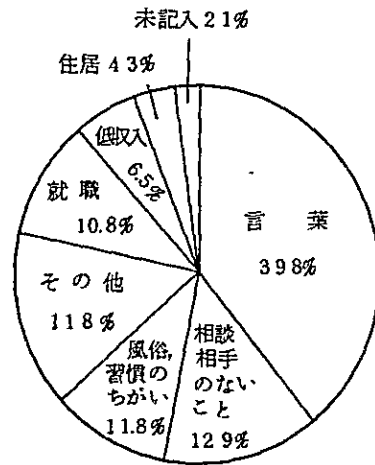
この結果からは\$500以下33.8%、\$1,001~2,000が29.7%と続き\$501~1,000及び\$2,001以上が17.6%、未記入1.3%の順である。

未既婚別では未婚者の63.1%は携行金\$1,000以下であり、ピークは\$700~800前後と思われる。

既婚者では家族員数により差異が出るのは当然であるが、\$1,000以上が52.7%であり、ピークは\$1,700～1,800前後と思われる。

なお、\$500以下の未既婚者別を比較すると未婚26.3%、既婚36.4%で携行資金は既婚者の方が少なく逆現象を起こしているが、ここでは未婚者(5名)は既婚者の4分の1の人数に過ぎず、対象人数が少ないことから比較は簡単には出来ない。既婚者では女性が僅か3名の為、子供をもっている家族が殆んどいないこと、渡航前に雇用先が決まっていた者が大半を占めていたことなどが挙げられる。男女別では未既婚とも多様化しており、この調査だけで傾向を述べることは困難である。

6. 入加当初最も困ったことは何ですか(性別、職業別)



区分	性別		男 性							女 性							総計		
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6		未記入	計
A. 言葉				3	10	4	4	1		22 (37.9)		5	2		2	5	1	15 (42.8)	37 (39.8)
B. 風俗、習慣のちがひ					4	1	1			6 (10.3)		2				2	1	5 (14.3)	11 (11.8)
C. 就職				3	1	2			1	7 (12.1)		2				1		3 (8.6)	10 (10.8)
D. 住居					3		1			4 (6.9)									4 (4.3)
E. 相談相手のないこと				1	2	1				4 (6.9)			5			3		8 (22.9)	12 (12.9)
F. 低収入					1	2	2			5 (8.6)						1		1 (2.9)	6 (6.5)
G. その他				1	5	2			1	9 (15.6)		1				1		2 (5.7)	11 (11.8)
H. 未記入					1					1 (1.7)						1		1 (2.8)	2 (2.1)
計				8	27	12	8	1	2	58 (100.0)		10	7		2	14	2	35 (100.0)	93 (100.0)

本設問も今回新たに設定したもので、これから移住しようとする人の参考とするものである。重複回答者も若干あったが、その大筋は変わらないと思われる。入加当初の障害で最も多いのは言葉の39.8%で、全体の約4割を占めている。特にケベック州はフランス語を使用していることから日本における習得機会も少ないことと思われ、これはケベック州に限ったものではないが、行けばなんとかなると考えて移住することには問題があろう。

職種別では、男性が専門、技術系職業の者45.5%、女性では、事務系従事者33.4%、主婦33.3%の回答である。

言葉の次に多いのが相談相手のないこと12.9%である。ケベック州は日系人の多いオンタリオ州やブリティッシュ・コロンビア州に比べ移住者は少数であり、また言葉のハンディも入加当初は相当含まれると思われ、他州よりも割合が高い。次いで風俗、習慣のちがひ11.8%その他11.8%と続く。

就職10.8%は意外と少なく喜ばしいことと云えるが、これは渡航前に就職先が決定していた者が半数いたためである。しかし、渡航前に就職が決まっていなかった者の割合でみると4カ月以上かかって決まった者が17.5%もあり、就職探しの困難に直面している者も少ない。

これからのカナダ移住者は、カナダ国内に就職先の有る者が比較的優先される傾向にあることから、渡加時における問題は少なくなると予想するが、転職を希望する場合には、カナダの会社等は一般に就労経験年数を重視すると言われ、職種もエキスパートを求める傾向

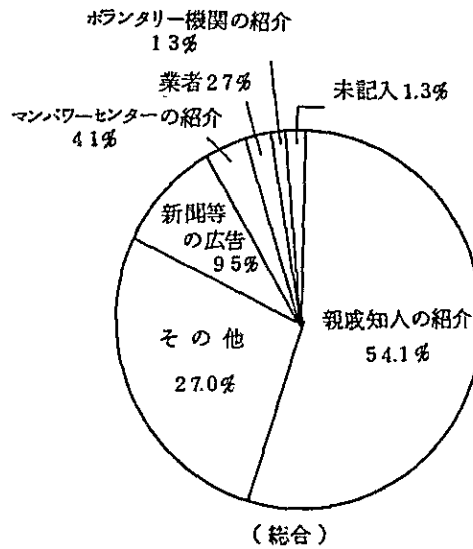
にあることを承知しておく必要がある。

男女別での特徴として相談相手のないことと答えたのは女性が22.9%（男性6.9%）と多い。また、男性では低収入8.6%（女性2.9%）などが挙げられるが、その他は顕著な差はない。

言葉と回答した39.8%のうち、職種別では言葉を重視した者が半数近くを占めたのは男性では専門、技術系職業に従事する者である。女性の場合は、事務系従事者と主婦の割合がほぼ同じであり、66.7%を占めた。

カナダは能力主義の国と云われており、専門、技術系従事者は、十分な技術を身につけておくことは言うまでもないが、ケベック州においては日常生活に限らず、技術専門用語もフランス語使用の会社が多いことを充分考慮しておく必要がある。

7. カナダでの最初の住居はどのようにして見つけれられましたか（性別、未既婚別）



区分	性別		男 性				女 性				総計
	未既婚別		未	既	未記入	計	未	既	未記入	計	
A. 日系団体の紹介											
B. 親戚・知人の紹介			4	21		25 (55.6)	10	5		15 (51.7)	40 (54.1)
C. マンパワーセンターの紹介			1	2		3 (6.7)					3 (4.1)
D. ボランティア機関の紹介				1		1 (2.2)					1 (1.3)
E. 新聞等の広告				4		4 (8.9)	2	1		3 (10.3)	7 (9.5)
F. 業 者				2		2 (4.4)					2 (2.7)
G. その他			1	9		10 (22.2)	1	9		10 (34.5)	20 (27.0)
H. 未記入								1		1 (3.5)	1 (1.3)
計			6	39		45 (100.0)	13	16		29 (100.0)	74 (100.0)

本設問も今回新たに設定し、側面的に入国当初の移住者の生活を調査したものである。

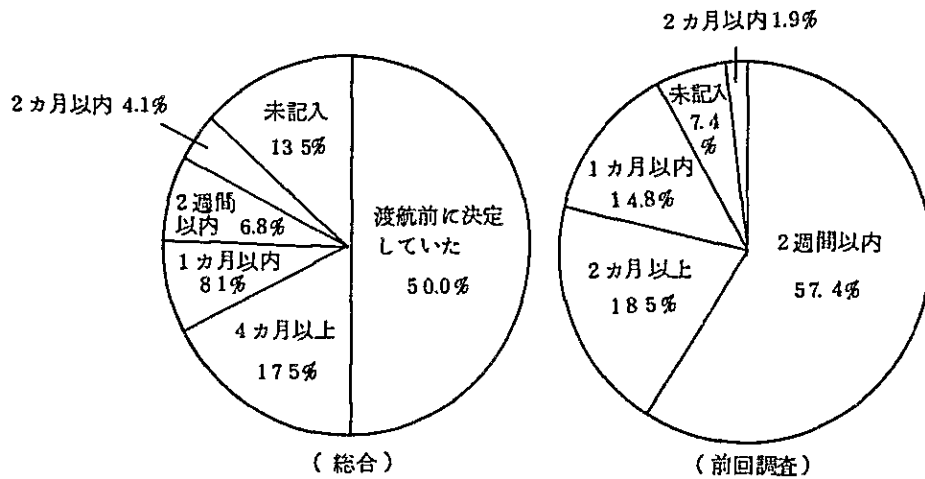
住居探して最も多かったのは親戚・知人・友人の紹介54.1%で半数以上を占め、次いでその他27.0%、新聞等の広告9.5%である。マンパワーセンターの紹介は4.1%で求職活動におけると同様、比重は低い。

不動産業者への直接訪問は僅か2.7%にすぎない。当時アン・スポンサード方式で移住したものは、求職活動の間、一時的宿泊所を利用するのが多いが、就職が決定したものは移住の形態は無関係に、環境、通勤の便利な住居を求め、転職するものが多い。

新聞等の広告の割合を、昨年度調査したB・C州では25.2%であり、差が少し大きいと言える。その他と回答した中で多かったのは、電話帳で調査したり、住宅地区を歩いて見付けたという積極派が目につく。

性別では、親戚、知人、友人の紹介、新聞等の広告等利用者は男性側に多く、女性はマンパワーセンター、ボランティア機関、不動産業者等を利用した者は皆無であるのが特徴である。しかし、その他が34.5%もあり、直接訪問して住居を決めたものは男性より多い。未既婚別では、未婚者では女性は親戚、知人、友人の紹介が66.7%、男性は16.0%で差異がある。逆に既婚者では、男性が84.0%、女性は33.3%である。新聞等の広告を利用しているものでは男性においてすべて既婚者である。女性においては、逆に未婚者が3分の2を占め、既婚者より多いが、女性の場合は夫と同居という回答があることによる。

B. カナダで最初の仕事につくまでにどの位かかりましたか（性別、職業別）



区分	性別		男 性							女 性							総 計		
	職業別	性別	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6		未記入	計
A. 渡航前に決定していた				4	12	5	6		1	28 (62.3)		4	2		2	1		9 (31.0)	37 (50.0)
B. 2週間以内					3	1				4 (8.9)						1		1 (3.5)	5 (6.8)
C. 1カ月以内				1	1	1	1			4 (8.9)			1			1		2 (6.9)	6 (8.1)
D. 2カ月以内					1				1	2 (4.4)		1						1 (3.5)	3 (4.1)
E. 4カ月以内																			
F. 4カ月以上				2	2	1		1		6 (13.3)		3	3				1	7 (24.1)	13 (17.5)
G. 未 記 入				1						1 (2.2)						9		9 (31.0)	10 (13.5)
計				8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

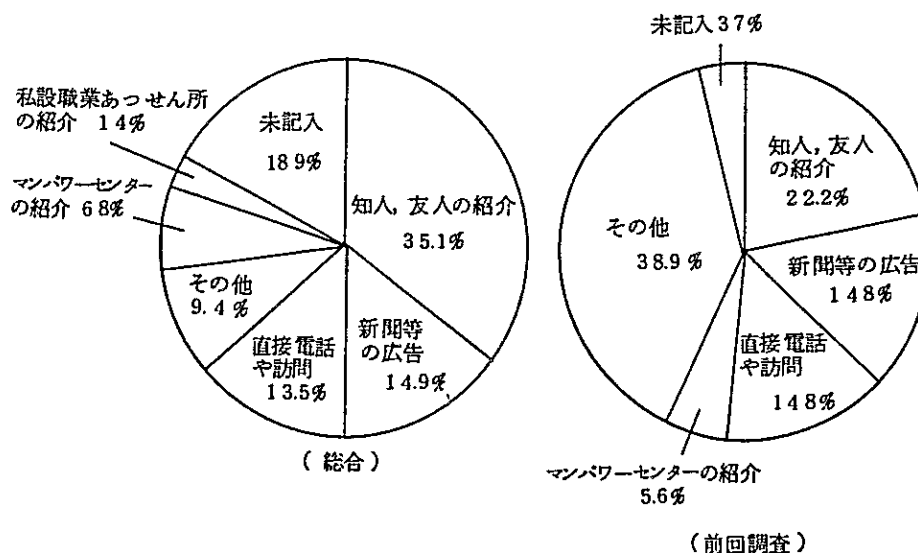
渡航前に決定していたという回答者が50.0%、未記入者を除く割合で57.8%と最も多く、スポンサーード方式の多いことがうかがわれる。未記入者および渡航前就労決定者を除く割合で見ると1カ月以内40.7%、1カ月以上4カ月未満33.3%、4カ月以上48.1%となっている。2カ月以上、4カ月以内と回答したものは皆無である。

アン・スポンサードで移住した場合、2人に1人近くが就職決定までに4カ月以上を要している。カナダ移住の困難さは、アン・スポンサードの場合、長期の就職探し及び多額の携行金を必要とすることがこの調査においても表らわれている。ただし、4カ月以上を要した者の中には、カナダ当局の語学訓練を受けていた者も含まれているものと想定される。

女性の方が求職期間が長くなる傾向にある。一例として未記入、渡航前就職決定者を除く割合で、4カ月以上と答えた者の割合が63.6%、これに対し男性では37.5%の率である。職種別で渡航前就職決定者の比率の最も大きいのは、男性ではサービス業、専門、技術系職業、特殊技能者、事務系従事者などの順である。女性では、事務系従事者、専門、技術系職業である。

渡航後、求職期間1カ月以内で就職した比率の最も高いのは、専門、技術系職業などに分類される職業で、次いで特殊技能者であり、最も低いのは、事務系従事者、サービス業である。逆に求職期間2カ月以上を要したのは、事務系従事者、専門、技術系職業に多い。前回調査との比較では、渡航前就職決定者を含め1カ月以内の者の比率が前回72.2%、今回64.9%とやや少なくなり、これは2カ月以内までにおいても同様の傾向を占める。2カ月以上の比率は、前回18.5%に対し、今回は17.5%と僅かながら少なくなっている。性別においては、女性の方が就職決定が遅れるという傾向は変わっていない。職業別では、前回と同様、今回も事務系は就職決定が遅い傾向にある。

9. カナダでの最初の仕事はどのようにして見付けられましたか（性別、職業別）



区分	男性								女性								総計
	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	
A. 知人・友人の紹介		5	7	2	1		2	17 (37.8)		6	2			1		9 (31.0)	26 (35.1)
B. 日系団体ボランティアの紹介																	
C. 新聞等の広告		2	3	1	1			7 (15.6)			2		2			4 (13.8)	11 (14.9)
D. 直接電話か訪問			4		1			5 (11.1)		1	2			1	1	5 (17.2)	10 (13.5)
E. マンパワーセンターの紹介			1	2		1		4 (8.8)						1		1 (3.5)	5 (6.8)
F. 私設職業あっせん所の紹介														1		1 (3.5)	1 (1.4)
G. 旅行中																	
H. その他		1	1		3			5 (11.1)		1				1		2 (6.9)	7 (9.4)
I. 未記入			3	3	1			7 (15.6)						7		7 (24.1)	14 (18.9)
計		8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

知人・友人の紹介により就労先を決めた事例が35.1%と最も多く、次いで新聞等の広告、直接電話や訪問しての順である。

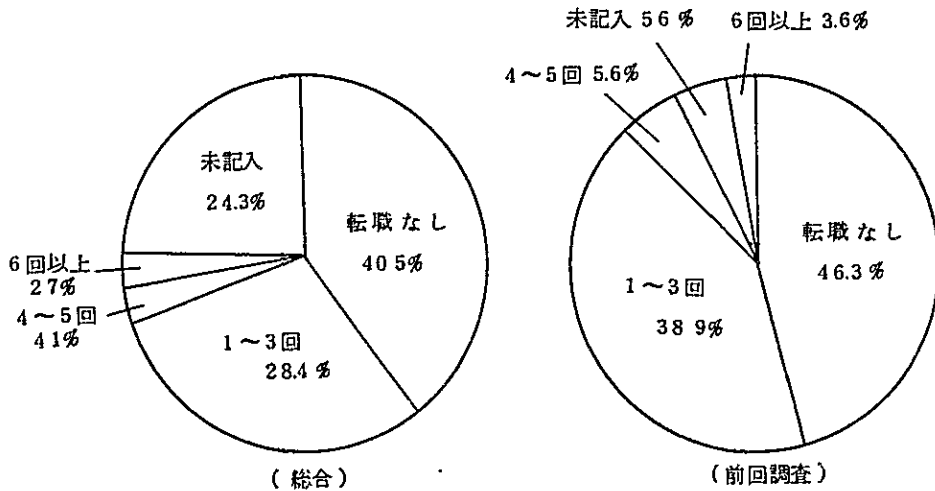
カナダに旅行して就職先を決めてから移住申請するというケースがあると仄聞しているが、今回の調査では皆無であった。また日系団体ボランティアの紹介も皆無となっている。

性別では、知人・友人の紹介が男女ともトップを占めているが、女性は次いで新聞等の広告、直接電話や訪問となっており、男性と逆になっている。職業別で知人・友人の紹介（未記入者を除く）の最も多いのは、男女とも事務系従事者（45.9%）であり、次いで専門技術系職業37.5%と続き、両分野での職業が殆んどを占めている。新聞・雑誌等の広告、直接電話や訪問では、専門・技術系職業が過半数を占め、次いでサービス業の順となっている。前回の調査と比較し、知人・友人の紹介の伸びが著しいが、他はほぼ同じ割合である。またブリティッシュ・コロンビア州と比較した場合、傾向は類似しており、著しい差は認められない。

前回の調査においても、知人・友人の紹介が最も多く、人間関係のコミュニケーションの中を広げることが大切であり、就職先の当ての無い者は、積極的に自分自身で開拓し、日本国内においては、移住研究会やトレーニング・コース等に参加することも必要であろう。

この調査で念頭に入れておかなければならないのは、アン・スポンサード方式で移住した者が、カナダへ到着後マンパワーセンターを利用する者は極めて少ないことが特徴と云える。

1Q カナダでの転職状況をお知らせ下さい(性別、在加年数別)



区分	性別		男 性						女 性						総 計		
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満		未記入	計
A. 転職なし			14	2	2	3	1		22 (48.9)	2	1	3	2			8 (27.6)	30 (40.5)
B. 1~3回			10	3	1				14 (31.1)	3		3	1			7 (24.1)	21 (28.4)
C. 4~5回			2	1					3 (6.7)								3 (4.1)
D. 6回以上				1					1 (2.2)		1					1 (3.5)	2 (2.7)
E. 未記入			3	2					5 (11.1)	5	3	1	4			13 (44.8)	18 (24.3)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

未記入者を除く割合で見ると、転職なし53.6%、1~3回が37.5%、4~5回が5.4%、6回以上が3.6%となっている。カナダでは不況になると労働者の解雇が頻発すると言われ、移住者側においても移住当初の数年は語学のハンディ、カナダ事情の知識不足等から暫定的に就労するものも少なくないのが、一般的傾向であったが、今回の調査では、未記入者を除く在加年数3年以上の者87.5%を対象とした場合、転職なしと回答した者が53.6%と高率を占め、他の州と比較した場合、定着率は極めて高い。(B・C州は16.7%)

他州と比べ、差異の大きな理由としては、渡航前に雇用先の決定していた者が過半数であっ

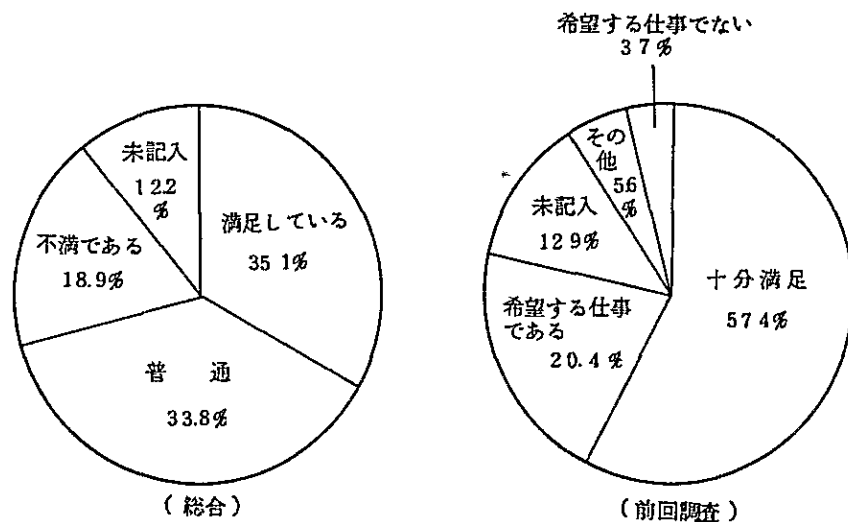
たことが第一要因であろう。

他に、転職しても必ずしも自分の能力が生かせる条件の良い会社が多いとは限らないこと、またフランス系と日本人は性格的にも相性が良いといわれていることも転職の少ない要因の一つであろう。当地はフランス語から容易に英語へ転化しないフランス人気質も少なからず日本人にも影響しているとみられている。

転職2～3回のうちに殆どどの者が大体安定した就労先を見付けていると解せる。

4回以上変わっている者は、約1割にすぎない。在加年数の少ないものと転職回数との関係は、この表においてはアンケート対象者が少ないため、傾向を述べることは一概にできるものではないが、ケベック州においては余り関係がないと云える。いずれにしろ、転職回数が少ないことは、職場での定着状況を示めすものであり、喜ばしい傾向にあると云えよう。職業別では転職経験なしが最も多いのは、男女ともサービス業、次いで専門・技術系職業の順となっている。1～3回では男女とも事務系従事者に最も多く、次いで特殊技能者に多い。前回調査との比較では、未記入者を除いた場合、転職なしは増えているが、転職した者の回数では著しい差はみられない。

11 現在の仕事に満足していますか（性別、職業別）



区分	性別		男						女						総計							
	職業別	性別	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4		5	6	未記入	計			
A. 満足している				3	8	3	4		1	19	(42.2)		2	4			1		7	(24.2)	26	(35.1)
B. 普通				1	8	5	2			16	(35.6)		4	2		2		1	9	(31.0)	25	(33.8)
C. 不満である				4	3		1	1	1	10	(22.2)		2				2		4	(13.8)	14	(18.9)
D. 未記入																9		9	(31.0)	9	(12.2)	
計				8	19	8	7	1	2	45	(100.0)		8	6		2	12	1	29	(100.0)	74	(100.0)

未記入者を除く割合では、満足している40.2%、普通38.5%、不満である21.5%の順である。日本では昭和52年の労働省による勤労者の職業生活に関する意識調査があり、「全体として現在の職場に満足していますか」の設問に対し、かなり満足している5.0%、まあ満足している47.0%、やや不満28.0%、大いに不満6.0%、どちらとも言えない14.0%という回答となっている。回答内容の設定が違い、また日本では年功序列制が一般的であるため、軽々しく比較することは当を得ないが、日本の方が、満足組も不満組もカナダより多く、カナダの方は普通が比較的多い。この表から比較することは難しいが、日本の不満と回答したものは、やや不満であるが82.4%を占めており、満足は日本の割合がカナダよりも11.8%程高いことからして、日本の勤労者の方が現状に満足する割合がやや高い感じがする。

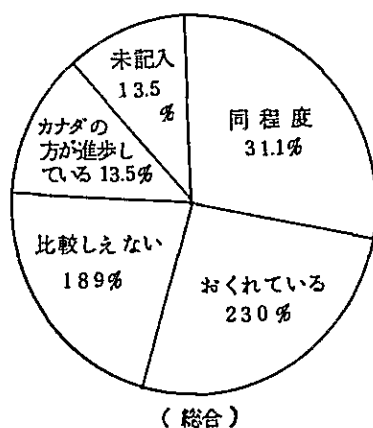
日本の場合、男女別では、満足している者は男性に多く、女性の方に不満度（男性33.0%、女性35.0%）がほんの僅か多い程度である。一方、カナダ移住者では、不満度は別として、日本よりも不満と回答した割合は少なく、性別では、未記入者を除き男性にやや不満であるものが多い。

職業別では、満足していると回答した者の割合でみると専門・技術系職業46.2%、事務系従事者19.2%、サービス業15.4%、特殊技能者11.5%である。反面、不満であると答えたものは、事務系従事者42.9%と最も多く、次いで専門・技術系職業21.4%、その他21.4%と続く。不満である理由は重複回答もあるが次の通りであった。

給与	仕事内容	会社内容	対人関係	未記入	計
7	5	3	3	2	20

また、前回調査と比較し、設定した回答に差異があるため、一概に断定はできないが、満足している者が減少し、不満の率が若干増加している。

12 貴方の仕事の分野で日本と比較するとどうですか（性別、職業別）



区分	性別								計	性別								計
	男				性					女				性				
職業別	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	計	
A. カナダの方が進歩している		2			1	1	1	5 (11.1)		2	2					1	5 (17.2)	10 (13.5)
B. 同程度		3	9	4	2			18 (40.0)		2	2		1				5 (17.2)	23 (31.1)
C. おくれている		2	7	3				12 (26.7)		2	2			1			5 (17.3)	17 (23.0)
D. 比較しえない		1	3	1	4		1	10 (22.2)		2			1	1			4 (13.8)	14 (18.9)
E. 未記入															10		10 (34.5)	10 (13.5)
計		8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1		29 (100.0)	74 (100.0)

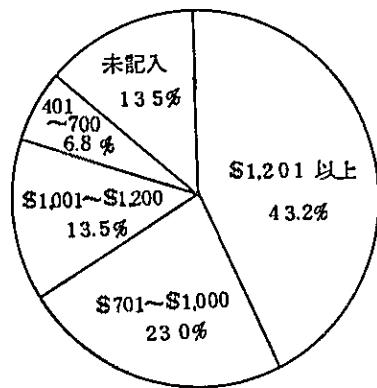
未記入者および無職に分類したものを除く割合は、カナダの方が進歩している13.1%、同程度37.7%、遅れている27.9%、比較し得ない21.3%の順である。

昭和52年度に調査を実施したB・C州では、カナダの方が進歩している13.8%、同程度27.0%、遅れている30.9%、比較し得ない28.3%となっており、進歩しているおよび遅れていると回答した者の率は、大西洋岸地域、太平洋岸地域においても大きな違いのないことが云える。

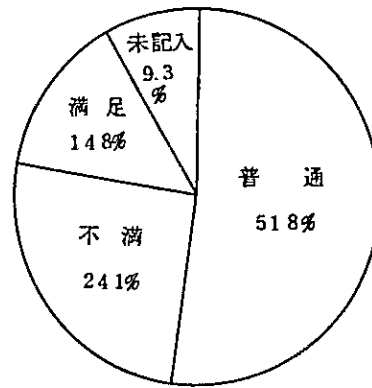
職業別では、カナダの方が進歩しているは事務系従事者に多く、逆に遅れていると回答したものでは、男女とも専門・技術系に多く、次いで男性では、特殊技能者、女性では事務系従事

者の順である。この設問はケベック州においては新たに設定したものであるが、回答者の職業分野、個人の技術程度はそれぞれ異なるために比較は難しく、強いて云えば、カナダの方が少し遅れている感じを受ける。

13 現在の収入は月額どの位ですか(性別、職業別)



(総合)



(前回調査)

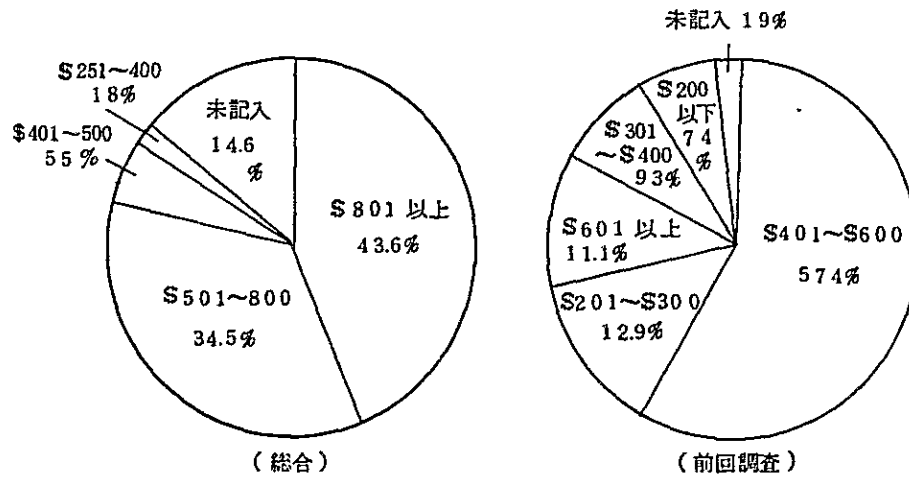
区分	性別								計	性別								計
	男				性					女				性				
職業別	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	計	
A. 0又は臨時収入																		
B. \$ 400 以下																		
C. \$ 401~700						1		1 (2.2)	2				2			4 (13.8)	5 (6.8)	
D. \$ 701~1000	1			1	5			7 (15.6)	5	3				1	1	10 (34.5)	17 (23.0)	
E. \$1001~1200			2	3	1			6 (13.3)	1	1				2		4 (13.8)	10 (13.5)	
F. \$1201以上		7	14	4	1		2	28 (62.2)			2			2		4 (13.8)	32 (43.2)	
G. 未記入			3					3 (6.7)						7		7 (24.1)	10 (13.5)	
計		8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)	

月収\$1,201以上が最も多く、未記入者を除く割合で50.0%、\$701~1,000(26.6%) \$401~700(7.8%)である。\$400以下のものは男女とも皆無である。男女別では、男性

\$1,201以上66.6%に対し、女性は18.2%、\$701~1,000では男性16.7%に対し、女性は45.5%に示されるように男性に比べ、女性の月収は概して低いと云える。男性は\$1,000以上(80.9%)の者が多く、女性は\$800~900前後の者が多いと予想する。職業別では、\$1,201以上の収入があるのは男性では事務系従事者が最も高く、次いで専門・技術系職業に従事しているものである。サービス業は率が低い。女性では専門・技術系職業に多い。また、女性の\$701~1,000では、事務系従事者に最も多く、次いで専門・技術系職業である。前回の調査では、大局的に収入に対する満足度を調査したところ、普通と回答したものが半数以上を占めた。しかし、満足と答えたものが14.8%と低調であった。

日本もカナダもインフレ要因から、物価は上昇の一方にあるといわれているが、カナダの各州は最低賃金(時間単位)をインフレに応じて是正しているが、前回調査との比較は、前回は具体的な月収額の調査目的ではなく、推移を裏付ける適切なデータが不足のために比較は難しい。なお、B・C州とを数字で判断する限り、月収\$1,201以上(未記入者を除く)のものが5割(B・C州は40.9%)を占めている。

14. 現在の1ヶ月の生活費はどの位ですか(性別、未既婚別)



区分	性別		男性			女性			総計	未既婚別	
	未既婚別		未	既	計	未	既	計		未婚	既婚
A. \$250以下											
B. \$251~400			1 (22)	3	1	4 (138)	5 (68)	4 (210)	1 (1.8)		
C. \$401~500			2 (44)	3	1	4 (138)	6 (81)	3 (15.8)	3 (55)		
D. \$501~800			4	13	17 (378)	5	6	11 (379)	28 (378)	9 (47.4)	19 (34.5)
E. \$801以上			1	20	21 (467)	2	4	6 (207)	27 (365)	3 (15.8)	24 (43.6)
F. 未記入				4	4 (89)		4	4 (138)	8 (108)	0	8 (14.6)
計			6	39	45 (100.0)	13	16	29 (100.0)	74 (100.0)	19 (100.0)	55 (100.0)

未記入者を除く割合で\$501~\$800の生活費(月賦等の返済金を含む)を計上しているものが42.4%と最も多く、次いで\$801以上40.9%、即ち\$501以上が83.3%を占めている。未既婚別では、独身の生活費は\$501~\$800が最も多く、47.4%、次いで\$251~\$400の21.0%である。

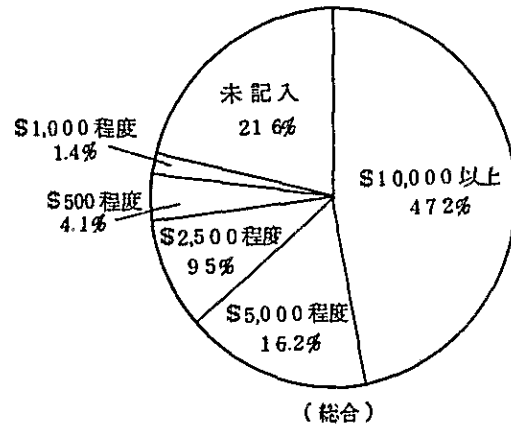
既婚者家庭では、\$801以上が51.1%、\$501~\$800が40.4%、両方で91.5%となっている。

従って、収入を別にして生活費を考える場合、未既婚者は\$450~\$700程度の負担が最も一般的であると思われる。既婚者の場合、家族構成人員にもよるが、\$700~\$900が最も一般的と思われる。

前回の調査(49年度実施)とでは、賃金の上昇、物価指数等の関係から生活費の傾向を表わすことには難点があるが、昨年度に調査したB・C州と比較してみた場合、既婚者家庭においては\$801以上が58.5%と若干B・C州の方が上回っており、\$501~\$800の割合では35.2%とケベック州の方に多い。総体的には\$501以上の生活費は両者とも9割強になっている。

未婚者においては、\$501~\$800のものがB・C州で50%の割合でケベック州共に最も多く、B・C州においては次に多いのが1ランク下げた\$401~\$500の23.3%(ケベック州は15.8%)であるが、ケベック州においては\$251~\$400(21.0%)である。B・C州との比較では、B・C州は調査対象人数が多く、職業、在加年数、未既婚別件数が異なることから、参考としてとどめるべきである。

16 現在の資産状況をお知らせ下さい(性別、在加年数別)



区分	性別		男性					女性					総計				
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. \$ 500程度			1	1					2 (44)				1			1 (35)	3 (41)
B. \$1,000程度						1			1 (22)								1 (14)
C. \$2,500程度				2			1		3 (67)		1	1	2			4 (138)	7 (95)
D. \$5,000程度			1	2	2	2			7 (156)	2		1	2			5 (172)	12 (162)
E. \$10,000以上			22	3	1				26 (57.8)	3	2	3	1			9 (310)	35 (472)
F. 未記入			5	1					6 (133)	5	2	2	1			10 (345)	16 (216)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

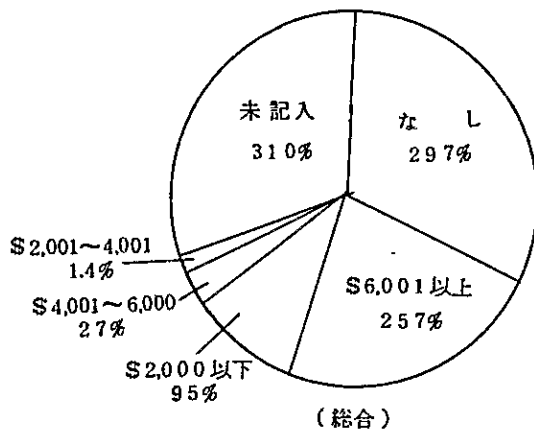
女性の未記入者が非常に多いが、この中には、既婚者が相当含まれ、回答を重複しないよう控えたものが多いと思われる。

\$10,000以上の資産保有者が47.2% (未記入者を除く割合では60.3%)、次いで、\$5,000程度は16.2% (未記入者を除く割合で20.7%)である。

男女別では、未記入者を除き、\$10,000のものが男性で66.7%、女性では47.4%、\$5,000程度は男性17.9%、女性26.3%である。設問13の収入とも関連するが、収入に応じて資産保有額は比例しており、総じて男性は女性よりも資産の多いことが伺える。

在加年数別では\$10,000以上の資産保有者の割合は、在加1年以上の者から29%、114%、143%、714%と起伏なく平均的な伸びを示しており、当然のことながら、在加年数を経るに従い資産の増加がみられ、年数の短いものは\$2,500以下に多い。職業別では、\$10,000以上は専門・技術系職業が553%を占め、次いで事務系従事者の211%である。サービス業関係は一般に低い。

16 現在の負債状況をお知らせ下さい(性別、在加年数別)



区分	性別		男 性					女 性					総計				
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. なし			6	3	1				10 (22.2)	4	3	2	3			12 (41.4)	22 (29.7)
B. \$2,000以下			4	1		1	1		7 (15.6)								7 (9.5)
C. \$2,001~4,000						1			1 (2.2)								1 (1.4)
D. \$4,001~6,000			1	1					2 (4.4)								2 (2.7)
E. \$6,001以上			14	2					16 (35.6)	1		1	1			3 (10.3)	19 (25.7)
F. 未記入			4	2	2	1			9 (20.0)	5	2	4	3			14 (48.3)	23 (31.0)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

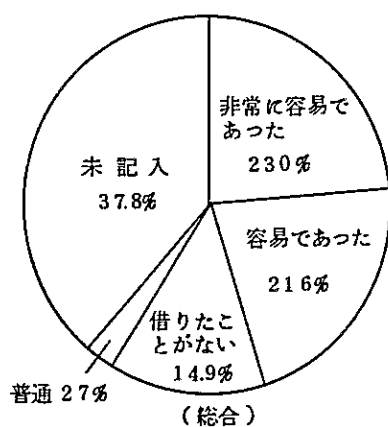
本設問も今回新たに設定したものであるが、プライバシーに関する事でもあり、アンケートに協力頂いた方が多かったことを先ず感謝したい。未記入を除く割合では、なし43.1%、次いで\$6,001以上が37.3%、\$2,000以下13.7%の順である。

負債のあるものは、全体で56.9%を占めるが、中でも最も数値の大きい\$6,001以上が4割弱で最も多く、負債のないものとは対照的であることが特徴と云える。

\$2,001~\$6,000の負債の保有者割合が低い。職業別での\$6,001以上の保有者は（未記入者を除く）、専門・技術系職業80.0%と高率を占め、特殊技能者13.3%、事務系従事者6.7%である。

傾向としては、負債保有者は技術系従事者に多いと云える。

17. 借入は容易でしたか（性別、職業別）



区分	性別		男 性						女 性						総計				
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4		5	6	未記入	計
A. 非常に容易であった				3	8	3	2		1	17 (37.8)									17 (23.0)
B. 容易であった				2	5	2	3		1	13 (28.9)			1			2		3 (10.3)	16 (21.6)
C. 普通				1	1					2 (4.4)								2 (2.7)	
D. 困難であった																			
E. 非常に困難であった																			
F. 借りたことがない				1	3				1	5 (11.1)		3	1			2		6 (20.7)	11 (14.9)
G. 未記入				1	2	3	2			8 (17.8)		5	4		2	8	1	20 (69.0)	28 (37.8)
計				8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

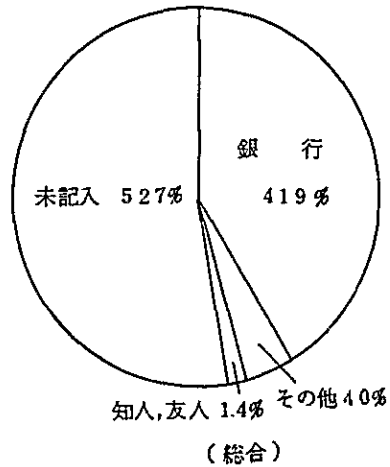
本設問も今回新たに設定したものであるが、未記入者を除く割合では、非常に容易であった37.0%、容易であった34.8%、普通4.3%、困難であった及び非常に困難であった0%、借りたことがない23.9%となっており、非常に容易であったが最も多い。設問16項との関連質問であり未記入者が特に目立つ。

在加年数別（未記入を除く）から、非常に容易であった事項をその割合で示した場合、1年以上12.1%、3年以上5年未満9.0%、5年以上7年未満12.1%、7年以上66.7%となり、在加年数の長いものほど借入するものが増えているが、反面、在加年数の少ないものは、負債のあるものが少ないことから（16項を参照）、借入を必要としない傾向にある。

この表から、借入の容易度と在加年数との関係を一概に判断することは難しいが、在加年数5年以下のもので21.1%が借入していることからして、在加年数は特に関係なく、カナダにおいての借入はある程度容易と見受けられる。

一方、困難な理由として信用力、借入知識の無さ、無担保、過去の借入過多があげられている。

18 借入はどのような内容でしたか（性別、職業別）



区分	性別		男 性							女 性							総計		
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6		未記入	計
A. 銀行				4	13	5	4		2	28 (62.2)			1			2		3 (10.3)	31 (41.9)
B. 日系団体																			
C. 知人・友人					1					1 (2.2)									1 (1.4)
D. その他				2			1			3 (6.7)									3 (4.0)
E. 未記入				2	5	3	2	1		13 (28.9)		8	5		2	10	1	26 (89.7)	39 (52.7)
計				8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

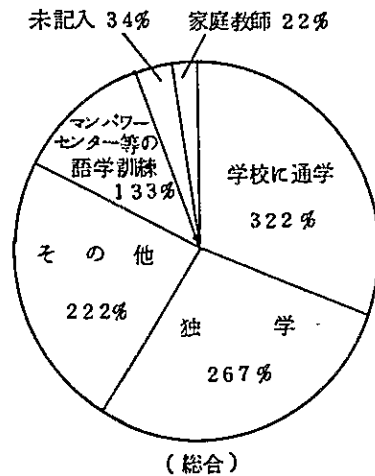
17項との関連設問である。未記入者を除く割合では、銀行88.6%、日系団体0%、知人・友人2.8%、その他8.6%で圧倒的に銀行からの借入が多い。

また、借入使途として未記入者を除く割合は、住居41.5%、住居付帯設備4.8%、自動車41.5%、その他12.2%となっており、生活資金および医療費等は皆無である。借入したもののうち、住居または自動車購入のためが全体の83.0%を占める。参考までにその他12.2%では、帰国旅費、旅行、土地の購入等があった。因に、銀行の借入利息は、9%以下が67

%、9～11%未満40.0%、11～14%未満43.3%、14～17%未満は0%、18～20%未満100%の順である。

9～14%未満の利息が全体の83.3%を示し、これが一般的な年利といえよう。

19 カナダでの言葉習熟法はどうでしたか(性別、在加年数別)



区分	性別		男 性					女 性					総 計				
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. マンパワーセンター等の語学訓練			3	3	1				7 (12.9)	3	1	1				5 (13.9)	12 (13.3)
B. 学校に通学			8	4					12 (22.2)	6	4	3	4			17 (47.2)	29 (32.2)
C. 家庭教師				1					1 (1.9)		1					1 (2.8)	2 (2.2)
D. 独学			12	5	1	2	1		21 (38.9)	1	1	1				3 (8.3)	24 (26.7)
E. その他			10		1	1			12 (22.2)	2	1	2	3			8 (22.2)	20 (22.2)
F. 未記入			1						1 (1.9)	1			1			2 (5.6)	3 (3.4)
計			34	13	3	3	1		54 (100.0)	13	8	7	8			36 (100.0)	90 (100.0)

本設問も今回新たに設定したものである。この設問でも重複回答者がみうけられる。未記入者を除く割合では、マンパワーセンター等の語学訓練13.8%、学校に通学33.3%、家庭教師2.3%、独学27.6%、その他23.0%となっており、学校に通学、独学のものが多く、マンパワー等の語学訓練は移住者にあまり利用されていないように見受けられる。

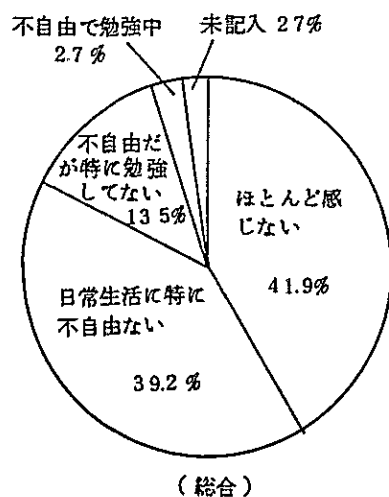
男女別では、未記入者を除き、男性が独学39.6%、学校に通学22.6%、その他22.6%、マンパワーセンター等の語学訓練13.2%、女性では、学校に通学50.0%、その他23.5%、マンパワーセンター等の語学訓練14.7%、独学8.8%の順である。男性の独学が多いのは、日中は仕事のために、学校に通う機会に恵まれないためであろう。女性は、既婚者が55.2%を占め、主婦としての専従者が多いことから、学校に通える機会は男性よりも相当に多いと云える。

未既婚別では、未記入者を除き、男性の既婚者ではマンパワーセンター等の語学訓練12.8%（未婚16.7%）、学校に通学12.0%（未婚0%）、家庭教師2.1%（未婚0%）、独学34.1%（未婚66.7%）、その他25.5%（未婚16.6%）である。

また、女性の既婚者はマンパワーセンター15.8%（未婚14.3%）、学校に通学47.4%（未婚64.3%）、家庭教師5.3%（未婚0%）、独学10.5%（未婚0%）、その他21.0%（未婚21.4%）となっている。その他では男性は、日本において習熟54.5%、友人・知人27.3%、仕事を通じ9.1%、日常生活9.1%、女性では日本において習熟66.7%、個人教授16.7%、日本以外で16.6%となっている。特徴としては、男女ともマンパワーセンターの利用率は低調であるが、男女の未婚者を比較すると、男性では学校に通学することは皆無で独学が7割強を占めるが、女性では、逆に学校に通学しているものが6割強を占め、独学が皆無となっているのが対照的である。

男性の既婚者では、学校に通学しているものが25.5%ある。

2Q 英語の不自由は感じますか（性別、在加年数別）



区分	性別		男 性					女 性					総 計				
	在 加 年 数		7 年 以上	5 年 以上	3 年 以上	1 年 以上	1 年 未 満	未 記 入	計	7 年 以上	5 年 以上	3 年 以上		1 年 以上	1 年 未 満	未 記 入	計
	A. ほとんど感じない	14	2	1	1	1			19 (42.2)	5	3	3		1			12 (41.4)
B. 日常生活に特に不自由ない	10	5	2	2				19 (42.2)	4	1	3	2			10 (34.5)	29 (39.2)	
C. 不自由で勉強中	1							1 (2.2)		1					1 (3.4)	2 (2.7)	
D. 不自由だが特に勉強してない	3	2						5 (11.2)			1	4			5 (17.3)	10 (13.5)	
E. 未 記 入	1							1 (2.2)	1						1 (3.4)	2 (2.7)	
計	29	9	3	3	1			45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)	

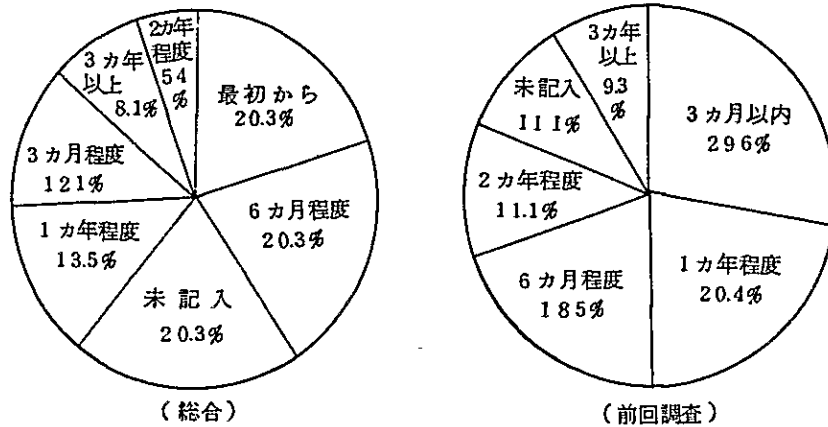
最も多いものは、ほとんど感じないで、未記入者を除いた割合は43.0%、次いで日常生活に特に不自由ない40.3%、不自由だが特に勉強してない13.9%、不自由で勉強中の順である。この質問では、英語を含めてあるが日常生活からして回答者の多くは仏語と解釈し回答したと思われる。従って、英語のみで回答したものも一部含まれると思うが、予じめ了解して頂きたい。言葉の面では、日常生活に不自由してないものが83.3%を越える。

男性を在加年数別でみると、未記入者を除く割合では、日常生活に支障ないものは、1年未満5年以下100.0%、5年以上77.8%、7年以上85.7%、女性は1年以上42.9%、3年以上85.7%、5年以上80.0%、7年以上100.0%となっている。

男性では、1年未満5年以下のものは7名いるが、100.0%を示めていることは、最近のカナダ移住者は、渡加前に語学を相当マスターしてきているものが多いことが伺える。また、女性は1年以上3年未満のものと7年以上では、差も大きく、在加年数が多くなるに従って着実に語学の習得率が高くなる傾向にある。また逆に不自由と答えているうちでは、在加年数5年以上経っているもので6.9%あることも認識する必要がある。

未記入者を除く職種別で見た場合、男性では日常生活に不自由していない者は専門・技術系職業47.4%、事務系従事者21.0%、サービス業18.4%、特殊技能者18.4%、女性は主婦45.4%、事務系従事者36.4%、専門・技術系職業18.2%である。

21 職場等で英語（仏語）に慣れるまでどの位かかりましたか（性別、職業別）



区分	性別		男 性								女 性								総 計
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	
A. 最初から				5	4	1	1			11 (24.4)		2	1				1	4 (13.8)	15 (20.3)
B. 3ヵ月程度				1	3		1			5 (11.1)		3	1					4 (13.8)	9 (12.1)
C. 6ヵ月程度				1	2	4	2	1	2	12 (26.7)		1	1				1	3 (10.3)	15 (20.3)
D. 1カ年程度				1	5		1			7 (15.6)					2	1		3 (10.3)	10 (13.5)
E. 2カ年程度						1	1			2 (4.4)		2						2 (6.9)	4 (5.4)
F. 3カ年以上					3	1				4 (8.9)			2					2 (6.9)	6 (8.1)
G. 未記入					2	1	1			4 (8.9)			1			10		11 (38.0)	15 (20.3)
計				8	19	8	7	1	2	45 (100.0)		8	6		2	12	1	29 (100.0)	74 (100.0)

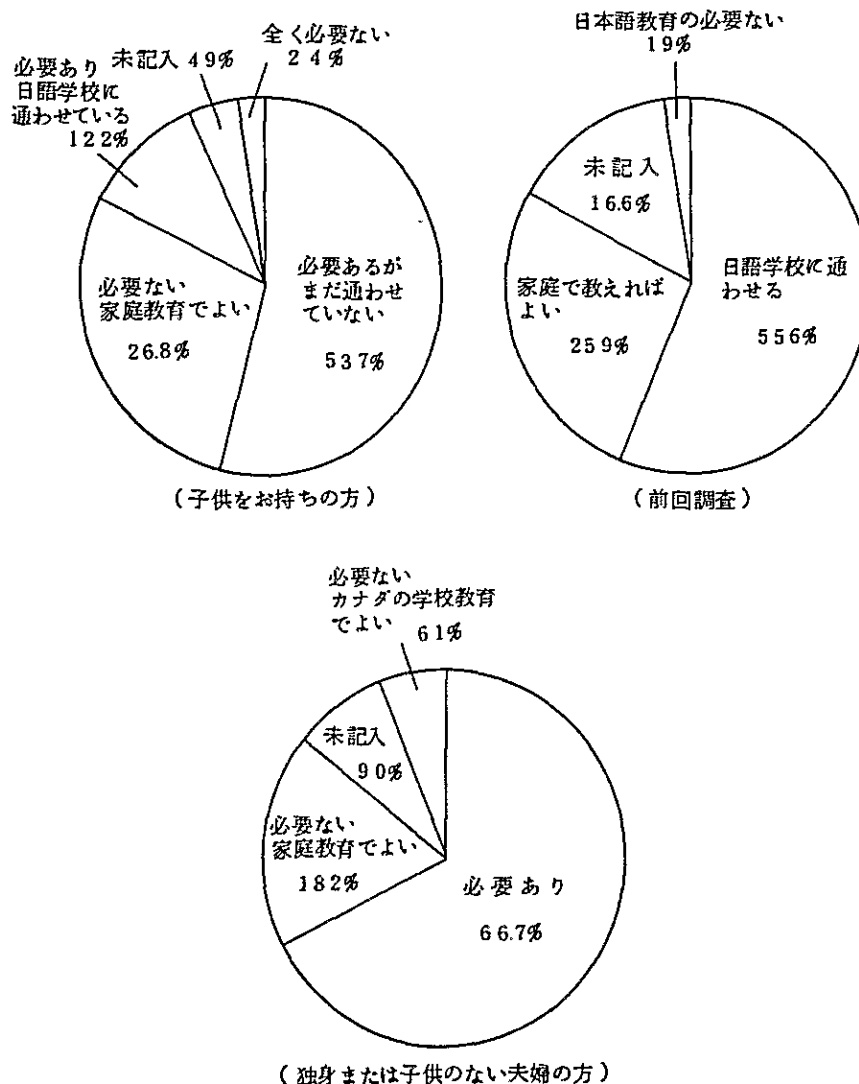
未記入者を除き、最初から25.4%、3ヵ月以上15.3%、6ヵ月程度25.4%、1カ年程度16.9%、2カ年以上6.8%、3カ年以上10.2%の順である。

職場等で英語（仏語）生活に慣れるまでの期間が半年までのものは66.1%であり、1年以内には83.0%と高率を示している。

反面、3年以上のものが1割強ある。生活安定の基盤とも云うべき言葉に対し、早い時期にマスターしているものが多いことは好ましいことである。性別では、男女とも会社に就労し1年以内までに慣れたもの（最初からは除く）を比較するに、男性の方が女性よりも言葉の吸収が相当に早い結果となっている。最初からも含めるとさらに差が大きくなる。

職業別では、1年以内に慣れたものは男女とも事務系従事者に特に多いが、他の分野では並行している。日本と違い一般的に終身雇用制度の無いカナダ社会に溶け込み、特に実力を希求するものは、渡航前に十分、勉強してくることが肝要である。

22 子供の日本語教育はどう考えますか（性別、在加年数別）



<子供をお持ちの方>

区分	性別		男 性					女 性					総 計			
	在 加 年 数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入
A. 必要あり日語学校に通わせている	5							5 (185)								5 (122)
B. 必要あるがまだ通わせていない	9	3		1				13 (482)	3	1	4	1			9 (643)	22 (537)
C. 必要ない家庭教育でよい	6	1						7 (259)	2	2					4 (286)	11 (268)
D. 全く必要ない		1						1 (37)								1 (24)
E. 未 記 入	1							1 (37)	1						1 (71)	2 (49)
計	21	5		1				27 (1000)	6	3	4	1			14 (1000)	41 (1000)

<子供のない方>

区分	性別		男 性					女 性					総 計			
	在 加 年 数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入
A. 必 要 あ り	6	4	3	2				15 (833)	4	1	1	1			7 (466)	22 (667)
B. 必要ない家庭教育でよい										1	2	3			6 (400)	6 (182)
C. 必要ないカナダの学校教育でよい					1			1 (56)				1			1 (67)	2 (61)
D. 未 記 入	2							2 (111)				1			1 (67)	3 (90)
計	8	4	3	2	1			18 (1000)	4	2	3	6			15 (1000)	33 (1000)

本来この回答の分析は、子供を持ったものだけを対象にした方がよりの確な内容となるが、既婚者は74.3%（内子供の有るものは7割強）あり、その大筋は既婚者、未婚者を問わず特に変らないと思われる。

子供の有る夫婦の内訳では、未記入者を除き、日語学校に通わせている、いないを問わず必要ありと答えたもの69.2%、必要ない、全く必要ないと回答したものが30.8%であり、3分の2以上のものが日語教育の必要性を感じている。

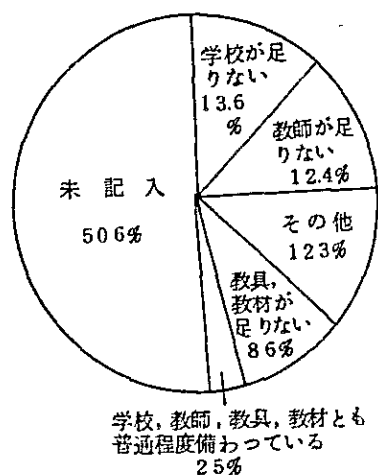
独身、子供のない夫婦でも、未記入者を除き73.3%のものが必要性有りとの回答をしてお

り、前回調査を上回った。必要ありと感じているものは、性別、未・既婚別を問わず多いが、特に男性の独身、夫婦で子供のない方においては、未記入者を除き、9割以上のものが、在加年数に関係なく必要ありと回答しているのが特徴と云える。(女性は500%)

在加年数との関係では、子供の有る方で、未記入者を除き、在加年数7年以上250%のものが、日語学校に実際通わせているが、7年以下では皆無である。これは、在加年数の多いものほど、子供の年齢層が学校教育を受ける年齢に達した者が多いことにあるが、在加年数7年以上のもので、希望はあっても、通わせていないものが男性450%、女性600%あることは考えさせられる。反面、子供への日語教育は家庭教育でよいと回答したもののうち、子供の有る方で、男性269%、女性282%ある。一方、独身、子供のない方では男性は皆無であるが、女性は429%と差異がある。

全く必要ないは、性別、未・既婚別を問わず稀である。

23 子供の学校による日語教育(性別、在加年数別)



(総合)

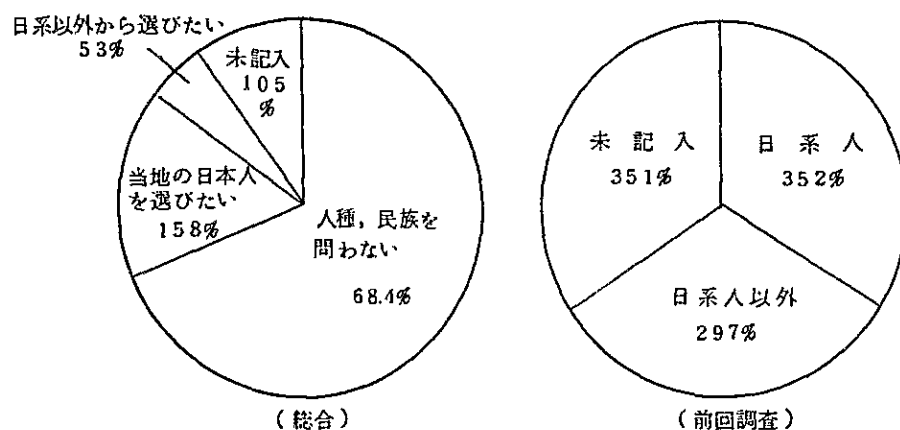
区分	性別		男 性					女 性					総 計				
	在 加 年 数		7 年 以上	5 年 以上	3 年 以上	1 年 以上	1 年 未 満	未 記 入	計	7 年 以上	5 年 以上	3 年 以上		1 年 以上	1 年 未 満	未 記 入	計
	A. 学校・教師・教具・教材とも普通程度備っている	1	1						2 (39)								
B. 学校が足りない	3	2	1	1				7 (137)	2	1	1					4 (133)	11 (136)
C. 教師が足りない	4		1	2	1			8 (157)	1	1						2 (67)	10 (124)
D. 教具・教材が足りない	5			1				6 (118)	1							1 (33)	7 (86)
E. そ の 他	6	1						7 (137)	1		1	1				3 (100)	10 (123)
F. 未 記 入	15	5	1					21 (412)	5	4	5	6				20 (667)	41 (506)
計	34	9	3	4	1			51 (1000)	10	6	7	7				30 (1000)	81 (1000)

この設問も、今回新たに設けたものである。22項との関連質問であるが、未記入者が非常に多い。これは、日語学校自体の実情を知っていないもの、子供が通学年令に達していないこと、家庭教育またはカナダの学校教育でよいとするものなどが比較的多いことが挙げられる。回答率は約半数であるが、重複回答者も見受けられる。未記入者を除き、学校が足りない27.5%、教師が足りない25.0%、その他25.0%、教具・教材が足りない17.5%、学校・教師・教具・教材とも普通程度に備わっている50%の順である。子供への日本語教育に関心を持っているものが、多い反面、日本語学校の実態は、学校が少ないことや、内容的にもまだまだ不十分であることが、はっきり伺える。

その他と答えているものでは、費用がかかる、日本語学校が少ないために場所が遠いが5割強を占め、次いで時間が足りない、生徒が足りない等がある。

子供の日本語教育については、日語学校を設けることが理想的と云えるが、種々問題も多く、今後の課題であろう。

24. 結婚相手についてどう考えますか（未婚者、性別、職業別）



区分	性別		男							女							総計	
	職業別	性別	1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6		未記入
A. 日本から呼びたい																		
B. 当地の日本人を選びたい							2		2 (33.3)		1						1 (7.7)	3 (15.8)
C. 日系2世か3世等を選びたい																		
D. 日系以外から選びたい														1			1 (7.7)	1 (5.3)
E. 人種・民族を問わない				1	1	2			4 (66.7)		6	2		1			9 (69.2)	13 (68.4)
F. 今のところ考えていない																		
G. 未記入											2						2 (15.4)	2 (10.5)
計				1	1	4			6 (100.0)		9	2		2			13 (100.0)	19 (100.0)

未婚者は、全体の25.7%に過ぎず、調査対象者の数が非常に稀少であることから、今回の調査で一既に傾向を述べることは無理がある。この為、随くまでも参考に留めておくべきであろう。また、今回の調査は、人種・民族を問わないの設問を付け加えたところ、最も回答が多く集中し、この為、前回調査との明確な比較は困難であり、B・C州と比較した。男性未婚者の結婚観は、人種・民族を問わない66.7%（B・C州42.9%）、当地の日本人を選びたい33.3%（B・C州4.8%）、日本から呼びたい0%（B・C州3.3%）、日系以外から

選びたい0%(B・C州0%)となっている。

女性では、未記入者を除き、人種・民族を問わない818%(B・C州445%)、当地の日本人を選びたい91%(B・C州222%)、日系以外から選びたい91%(B・C州111%)の順である。

この表から判断する限り、男性では日本から呼びたいはB・C州で333%を占めているが、ケベック州においては皆無であるのが特徴と云える。フランス系は、日本人と感情面において類似しており、外国人を見ると非常に親切なこと、他国人の文化、習慣を理解しようとする点、家族の絆が強いことなど共通点が多いと云われている。従って他州の日本人移住者と比し、当地の女性と結婚する割合は高い。又、今回の調査では日系以外から選びたい、日系2世・3世等を選びたいは、両州とも皆無であり、回答が分散しているが、結局は相手次第であり、人種・民族を問わないものが非常に多くなったと思われる。

傾向としては、食生活、言語、風俗、習慣等の違いからして、日本人女性を求む傾向が若干強いと想像する。

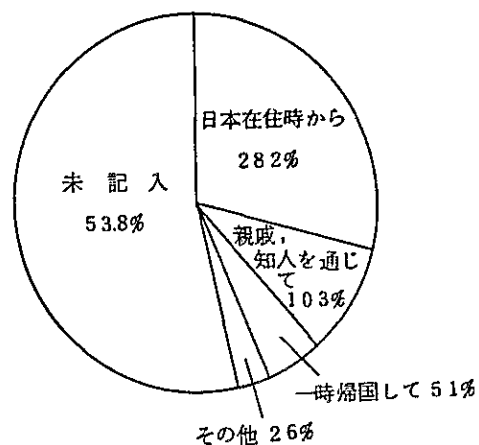
女性においても、人種・民族を問わないが多数を占めるが、女性の順応性からして日系人、日本人以外は特に拘わらない傾向にあると思われる。今回の調査では、未婚対象者が僅か13名に過ぎず、データ不足であるが、女性の結婚観は一般的に飽くまでも相手の男性次第であり、この傾向は男性よりも強い。なお、参考までに、日本には海外へ花嫁移住を希望するもののために、財団法人国際女子研修センター(神奈川県茅ヶ崎市)がある。

25. 未婚の方で日本からと答えた方は結婚相手をどうさがしますか(男性、職業別)

24項との関連設問であるが、日本から呼びたいは皆無である。ここでは、男性の未婚者を対象に日本から女性を呼びたい希望をもっているものを職業別に追跡調査しようと図ったのであるが、24項の回答が皆無の関連から、ここでは、全員が未記入であり、従って分析は困難である。未婚男性は6名あったが、職業はサービス業4、大学研究助手1、機械工1である。過去の各州の調査では、日本から女性を呼び寄せたい希望を持っている者は比較的多いと云えた。

ケベック州の調査においては、独身男性の対象者が少ないことから、この結果が当を得ているとは思われないが、本設問に対する回答が皆無である。理由として考えられるのは、サービス業(コック)が670%を占め、一方、女性未婚者のカナダ日本人移住者はサービス業に従事している者の割合が非常に高い関係上、交流の機会も多く、当地の日本人女性を希望する割合が高くなったものと思われる。

26. 既婚の方で日本から夫人を呼ばれた方はどうでしたか(男性、職業別)



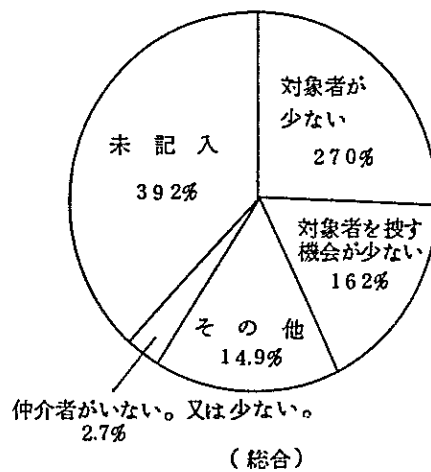
区分	性別		職業別						計	
	男	性	1	2	3	4	5	6		未記入
A. 親戚・知人を通じて					2	1	1			4 (10.3)
B. 知人・友人を通じて										
C. 移住関係者を通じて										
D. 一時帰国して					1	1				2 (5.1)
E. 日本在住時から				5	4	1	1			11 (28.2)
F. その他							1			1 (2.6)
G. 未記入				3	11	4		1	2	21 (53.8)
計				8	18	7	3	1	2	39 (100.0)

ここでの設問は、男性の既婚者で日本人女性と結婚した者に対して、焦点を絞った調査であるが、未記入者が非常に多く、理由としてはカナダへ移住した日本人女性、日系2世・3世の女性、日系人以外の女性と結婚した者が相当数含まれているためと思われる。

未記入者を除いた割合では、日本在住時から61.1%、親戚・知人を通して22.2%、一時帰国して11.1%、その他5.6%である。想像するとおり、日本在住時から結婚して渡加した

者の割合が6割強を占めている。一時帰国しては、休暇、渡航運賃等が絡んでくること、また結婚問題は一時帰国してもチャンスが多いとも限らないことなど、日本に帰国する割合はどうしても少なくなる。職種別では、未記入者を除き、事務系従事者全員の者が日本在住時からである。

27. 結婚問題で阻害要因は何だと思いますか（性別、未既婚別）



区分	性別		未既婚別				計		
	男	女	未	既	未記入	計			
A. 対象者が少ない	2	12			14 (31.1)	5	1	6 (20.7)	20 (27.0)
B. 対象者を捜す機会が少ない	2	5			7 (15.6)	4	1	5 (17.3)	12 (16.2)
C. 仲介者がいない又は少ない		1			1 (2.2)		1	1 (3.4)	2 (2.7)
D. 経済的困難									
E. その他		6			6 (13.3)	2	3	5 (17.2)	11 (14.9)
F. 未記入	2	15			17 (37.8)	2	10	12 (41.4)	29 (39.2)
計	6	39			45 (100.0)	13	16	29 (100.0)	74 (100.0)

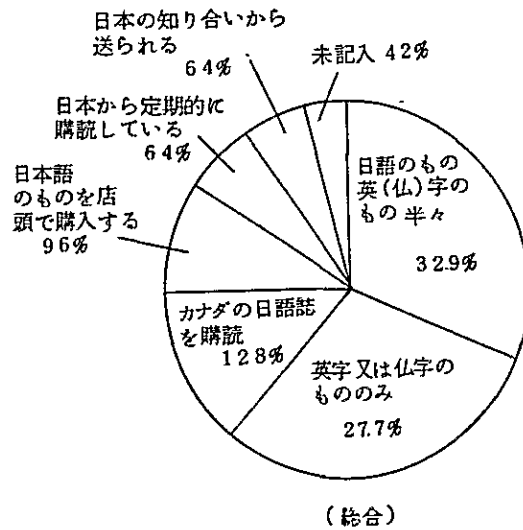
24、25、26項との関連設問である。ここでも、未記入者の割合が非常に多いが、これは、阻害要因のない日本在住時から結婚していた者が含まれるためである。

未記入者を除く割合では、対象者が少ない44.4%で最も多く、次いで対象者を捜す機会が

少ない26.7%、その他24.4%、仲介者がいない45%の順である。最も割合の高い対象者が少ないでは、男性50.0%、女性は35.3%である。

未既婚別では、未記入者を除き、対象者が少ないでは、男性は未婚、既婚者ともに50.0%を占めているが、女性の既婚者においては16.7%となっており、女性の交際範囲の広さを示している。男性では、日本人女性を対象に回答したものが相当多いと予想する。対象者を探す機会が少ないでは、未記入者を除き、未婚者の男女とも既婚者の2倍強を占め、特に男性側に比較的多い。回答者の中には友人が少ないためと答えているものもある。その他の回答者では自分自身に精神的結婚の余裕がないことを挙げているものが多い。経済的に困難は皆無である。

2B 新聞、雑誌は主として何をお読みですか（性別、在加年数別）



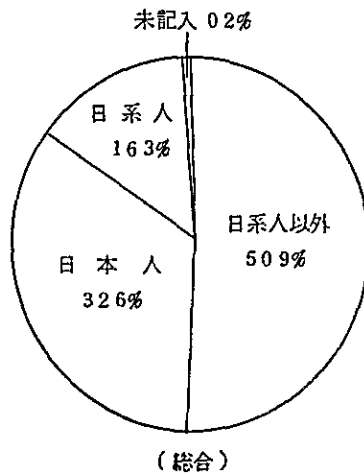
区分	性別		男 性					女 性					総 計				
	在 加 年 数		7 年 以 上	5 年 以 上	3 年 以 上	1 年 以 上	1 年 未 満	未 記 入	計	7 年 以 上	5 年 以 上	3 年 以 上		1 年 以 上	1 年 未 満	未 記 入	計
	A. 日本から定期的に購読している	1	2						3 (48)	2	1						3 (94)
B. 日本の知り合いから送られる	3	1	1					5 (81)				1			1 (31)	6 (64)	
C. 日本語のものを店頭で購入する	4	2	1					7 (113)				2			2 (63)	9 (96)	
D. カナダの日本語誌を購読	6	1	2					9 (14.5)	1		1	1			3 (94)	12 (128)	
E. 英字又は仏字のもののみ	10	2		1				13 (210)	4	2	4	3			13 (406)	26 (277)	
F. 日本語のもの英(仏)字のもの半々	14	4	3	1	1			23 (371)	3	3	1	1			8 (250)	31 (329)	
G. 未 記 入	1			1				2 (32)	1		1				2 (62)	4 (42)	
計	39	12	7	3	1			62 (100.0)	11	6	7	8			32 (100.0)	94 (100.0)	

男女とも重複回答者があるが、その大筋は変わりないと思われる。カナダ国内にも邦字新聞が発行されており、新聞、雑誌の違いはあっても、日本語のもの(英)字のもの半々に併読している者が32.9%で最も多い。

次いで仏字(英字)のもののみ27.7%、カナダの日本語誌を購読12.8%の順である。何らかの形で日本の新聞、雑誌を購読している者の割合は68.1%と高率であり、日本の発行物を読む傾向は非常に多いといえる。また、仏(英)の新聞、雑誌購読者も60.6%にのぼっており、日本語、仏(英)字に限らず、併読しているものが多いことが伺える。性別では、日本語の新聞、雑誌等を読む割合は男性側に多く、女性では、逆に仏(英)字を読む割合が高い。

在加年数別では、年数が長くなるに従い、新聞、雑誌を購読するものが多くなり顕著な伸びを占めている。仏(英)字のもののみでもその傾向は強く、カナダへの定着の現われであろう。

29. カナダでの比較的親しい友人の数はどの位ですか（性別、職業別）



区分	性別		男 性								女 性								総計
	職業別		1	2	3	4	5	6	未記入	計	1	2	3	4	5	6	未記入	計	
A. 日本人				47	152	126	70	3	3	401 (32.1)		31	36		11	30		110 (34.2)	511 (32.6)
B. 日系人				35	37	70	32		3	177 (14.2)		21	35		2	10	10	78 (24.2)	255 (16.3)
C. 日系人以外				157	205	151	134	6	13	666 (53.5)		53	36		4	40		133 (41.3)	799 (50.9)
D. 未記入					2					2 (0.2)						1		1 (0.3)	3 (0.2)
計				229	336	347	236	9	19	1,246 (100.0)		108	106		17	81	10	322 (100.0)	1,568 (100.0)

通常、友人ができるのは、趣味、職業等を通じた共通性を持っている場合のケースが多いがカナダにおいては、言葉の問題、在加年数等による環境的要素も含まれ、日本在住時とは異なる面もあると予測する。又カナダの会社は、日本の年功序列、義理人情的な思考は一般的でない。

従って、この設問では、職業別で捉えたものの、各人の要素は種々絡むために、飽くまでも参考に留めたい。

最も割合が高いのは、日系人以外 50.9% である。職業別では、男性が専門・技術系職業 30.8%、その他の職業では、20% 強と並行している。女性では事務系従事者が約 4割を占めている。

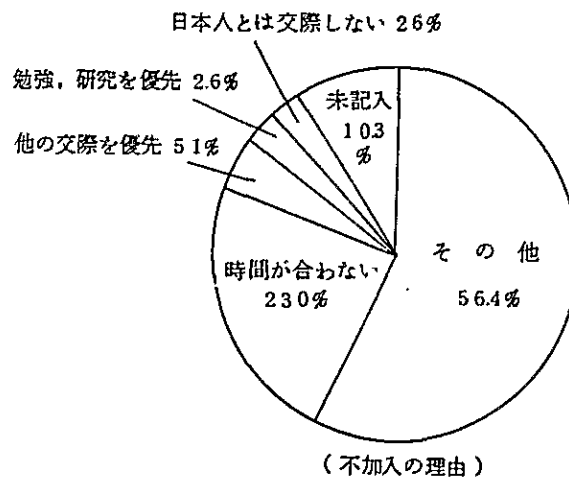
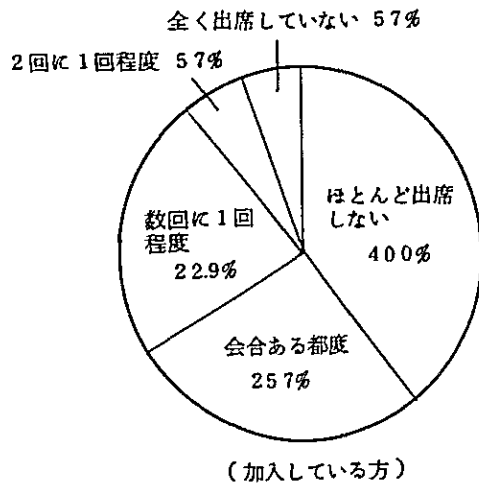
次いで日本人32.6%で、男性では専門・技術系職業と特殊技能者が全体の約7割を占める。女性では、職業的に目立った差はない。男性は総じて日系人以外が多いが、職種別で比較的多いのは、事務系従事者とサービス業で6割を占める。これは、職業柄、技術系従事者よりも、交際等の機会が多くなり、範囲が広まるためであろう。

女性においても、労働従事者（主婦は除く。）では、日系人以外が多いが、特に事務系従事者では約5割に及んでいる。

反面、主婦・無職においては、日本人の友人が64.7%と極めて多く、特徴と云える。この設問は、追求したものでないため、重複回答者が限れ上がったが、友人は人種を問わず広範囲に亘るものであることを念頭に入れておく必要がある。

友人が多くなることは、カナダ社会に溶け込みつつある現われであり、日系人以外と答えたものの多いことは、喜ぶべき傾向であろう。

3Q (1) 日系人団体組織に加入していますか（性別、在加年数別）



<加入している方>

区分	性別		男 性					女 性					総計				
	在加年数	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. 会合ある程度	4			1	1				6 (240)	1	1	1				3 (300)	9 (257)
B. 2回に1回程度	1								1 (40)	1						1 (100)	2 (57)
C. 数回に1回程度	5	2							7 (280)		1					1 (100)	8 (229)
D. ほとんど出席しない	7	1	1						9 (360)	1	1	3				5 (500)	14 (400)
E. 全く出席していない	1	1							2 (80)								2 (57)
F. 未記入																	
計	18	4	2	1					25 (1000)	3	3	4				10 (1000)	35 (1000)

<加入していない方> 不加入の理由は何ですか

区分	性別		男 性					女 性					総計				
	在加年数	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. 時間が合わない	1	3	1	1					6 (300)		1		2			3 (158)	9 (230)
B. 勉強・研究を優先	1								1 (50)								1 (26)
C. 他の交際を優先	1					1			2 (100)								2 (51)
D. 日本人とは交際しない	1								1 (50)								1 (26)
E. その他	5	2		1					8 (400)	5	1	3	5			14 (737)	22 (56.4)
F. 未記入	2								2 (100)	2						2 (10.5)	4 (103)
計	11	5	1	2	1				20 (1000)	7	2	3	7			19 (1000)	39 (1000)

この設問も今回新たに設置したものである。無回答者が若干あったが、日系団体組織に加入している者47.3%、加入していない者52.7%である。日系団体組織に加入している者のうち、性別では、男性71.4%、女性28.6%で、男性側が圧倒的に多い。

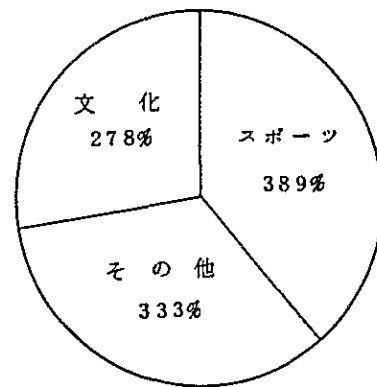
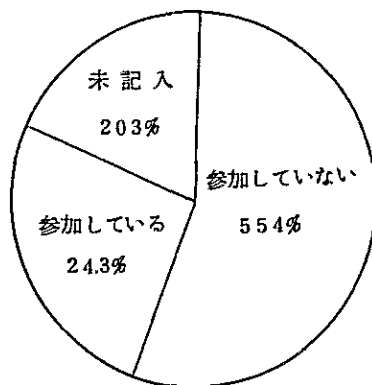
出席回数では、殆んど出席しないの方が4割強を占めており、出席しているは54.3%であるが、常時出席している、2回に1回程度までは31.4%にすぎない。実際常時出席しているのは25.7%あるが、出席率では女性が高い。しかし、男性よりも絶対数は少ない。

日系人団体組織の加入者は、在加年数の長い者ほど多く、特に男性においては、在加年数7年以上の者が72.0%を占めている。女性は全員が在加年数3年以上である。

加入者から考察するに、出席率の割合は、低調であると云える。又、不加入の理由としては、未記入者を除き、その他62.9%の割合で最も多く、次いで時間が合わない25.7%で、この分を合わせると全体の9割弱を占めている。

その他と回答した者22名の内、81.8%のものが既婚者であるが、内訳は日系人団体組織の必要性を感じない6名、機会がない3名、組織の有ることを知らない3名、地理的に不可能2名、経済的に困難1名、加入してないが時に参加1名、その他6名となっている。必要性を感じないと答えた者は男女ともすべて既婚者である。この調査で伺えることは、女性では、時間があわないと回答したものを日系団体組織に加入する希望があるに含めたとしても、女性は必要性を感じないと思っているものが多く、男性においては、女性よりも必要性を感じており、実際の加入者も多い。

3Q(2) 他のクラブ等のグループに参加していますか(性別、在加年数別)



参加している方

区分	性別		男 性					女 性					総計				
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上		1年以上	1年未満	未記入	計
A. 参加している			8	3					11 (24.5)	4	1	2				7 (24.1)	18 (24.3)
B. 参加していない			14	5	1	3	1		24 (53.3)	4	3	5	5			17 (58.6)	41 (55.4)
C. 未記入			7	1	2				10 (22.2)	2	1		2			5 (17.3)	15 (20.3)
計			29	9	3	3	1		45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

未記入者を除き、日系人組織以外の他のクラブに参加していないと回答した割合が69.5%、参加している30.5%の割合である。参加していないと答えた者の男女差は殆んどない。

クラブに参加しているものは、約3人に1人の割合であるが、種類では、スポーツクラブ38.9%、文化クラブ27.8%であるが、これ以外のクラブに参加しているものが33.3%もある。スポーツでは、カナダならではの野外スポーツ(テニス、ゴルフ、スキー等)が多いと予想する。

未婚別では、グループに参加している者は、男性においては既婚者に圧倒的に多く、その割合はスポーツクラブ44.4%、文化クラブ44.4%に至っている。

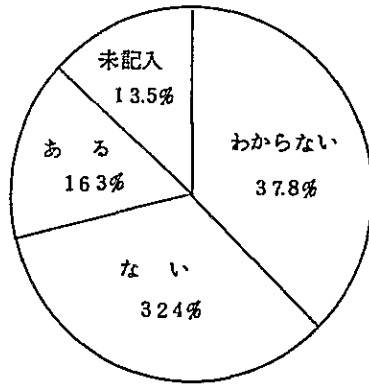
女性では、逆に未婚者に多く、スポーツ、文化以外のクラブ参加の割合が60.0%と最も多く、スポーツクラブは40.0%である。女性の未婚者で文化クラブへの参加者はない。

女性の既婚者の場合は、子供の養育がある為か、女性の未婚者、男性の既婚者に比し、参加者は非常に少ない。

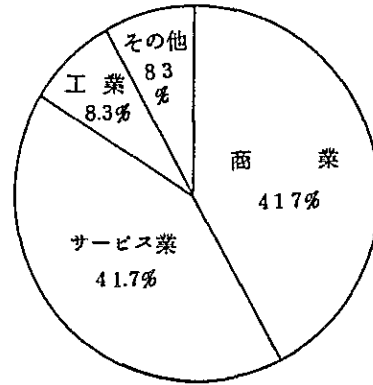
性別では、スポーツクラブへの加入者は男性に多いと云える。又、今回の調査で意外であるのは、文化クラブへの参加者は女性に多いと予想したが、僅か20.0%に過ぎず、退行現象を起こしている。なお、クラブに入会した動機は、今回調査で把握は困難であるが、より多くの人々と広く交流、親睦をもつことにより、何かに役立つ期待感を抱いている者が多いと予想する。

B・C州においては、スポーツクラブ60.6%、文化クラブ22.5%、その他のクラブ14.1%であるが、ケベック州と比較し、内容的には比較的变化が大きい。又、クラブに参加していないものも、ケベック州に多い。

31 将来独立の計画はありますか（性別、在加年数別）



(総合)



(職業別区分)

区分	性別		男性						女性						総計		
	在加年数		7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満	未記入	計	7年以上	5年以上	3年以上	1年以上	1年未満		未記入	計
A. ある	6	2				2			10 (22.2)	1		1				2 (6.9)	12 (16.3)
(A) 農業																	
(B) 工業										1						1 (50.0)	1 (8.3)
(C) 商業	4	1							5 (50.0)								5 (41.7)
(D) サービス業	1	1			2				4 (40.0)			1				1 (50.0)	5 (41.7)
(E) その他	1								1 (10.0)								1 (8.3)
B. ない	7	3	2						12 (26.7)	4	2	3	3			12 (41.4)	24 (32.4)
C. わからない	12	3	1	1	1				18 (40.0)	3	1	3	3			10 (34.5)	28 (37.8)
D. 未記入	4	1							5 (11.1)	2	2		1			5 (17.2)	10 (13.5)
計	29	9	3	3	1				45 (100.0)	10	5	7	7			29 (100.0)	74 (100.0)

未記入者を除き、将来独立の計画のある者は18.8%、わからない43.7%、ない37.5%である。独立の計画を持っている者は全体の約2割弱で、性別では、男性25.0%、女性8.0%

%で男性に多い。

独立の希望職種としては、商業41.7%、サービス業41.7%、工業8.3%、その他8.3%の割合である。男性では、商業50.0%、サービス業40.0%に大別されるが、この種の職業は、工業、農業等に較らべ独立しやすい面があるからであろう。

独立するに際しては、カナダ国内の経済状況、資金、個人の信用等の条件を備えていることが必要であろうし、結局、在加年数の長い者ほど独立を希望している者が多い。

オンタリオ州、B・C州等から比較するに、カナダ国内の経済不況の影響もあろうが、モンクトリオール市は商業都市と云われている割合には独立希望者は少ない。

なお、わからない43.7%の中には、将来独立の夢を持っている者も結構多いと予想する。

32 移住の動機

移住の動機については、千差万別であり、幾つかの要因が互に影響し合って生じると考えられるため、記述式にしてある。

従って、これを類型化し、表現することには問題があるが、比較的多く、考え方の似通ったものを抽出すると全体の約4割以上の者が、美しい豊かな国カナダのイメージ、英語（仏語）の国、或いは漠然と海外で生活してみたいと考えてカナダ移住を思い立ったようである。特別な目的や理由もなく、ただ何となくと答えた者も5名いる。文を書く上で気負いがまじりがちであることを考慮に入れても、一昔前の悲壮さは影を薄め、国内での移転の延長といった気軽なものに変化してきていることが伺われる。

次いで多いのが配偶者17.9%で、特に女性においては、カナダ人との国際結婚組も多い。仕事の関係や、職業経験の能力拡大は約14.9%、留学やカナダ旅行の延長で移住し、当地で永住に切り換えた者は11.9%にのぼる。日本を離れたい、日本に嫌気がさしたなどの日本脱出タイプは7.5%と少ないが、カナダへのあこがれ型グループと裏腹にも考えられ、もつと増えると予想するが、把握は困難なのでここでは割愛する。

子供の将来を考えては3.0%と以外に低い。

33 カナダ人に対する印象

本設問も記述式である。ある国民を一音で性格づけることには無理があり、カナダの場合は特に多種多様な人種民族が集まる国であるだけに、なお更困難であるが、これから移住しようとしている人が、あいまいではあってもカナダ人は日本人とこんな点が違いそうだということを承知しておくことも必要と考えて、実際に生活している人々の意見を尋ねた。従って肯定と否定を併記する意見が目立った。また、フランス系と英国系の長所、短所を述べたものも多い。肯定の理由は、親切、自分を大切に、家族を大切に、生活をエンジョイしている、善良友好的、大らか、あっさりしている、素朴等であった。否定的理由では、利己主義、自己主張が強い、勤勉さの欠如、遊び好き、保守的、単純、金銭に細かい等であった。また悪い人は日本では考えられない程悪く、良い人は極めて親切で心から話し合え、この間の差が著しいとい

う意見もあった。

34. 移住希望者へのアドバイス

日本を離れても、これから移住しようとする日本の後輩への好意のこもった懇切丁寧なアドバイスであった。自己のあるいは他者の苦い体験から生れたもの等、貴重な意見が多い。最も多かったのは言葉と技術であった。言葉においては、ケベック州に限り、フランス語主体というカナダでも、特殊地域の州であり、カナダ人とわたりあえるためにも、日本国内で徹底的に勉強してくることを助言している。技術では自分の専門分野の技術を十分に身につけてくることのアドバイスが多い。技術程度は、日本や米国の方が上であると見る者が多いが、カナダは日本と違い、技術程度が低ければ首を切るのが日常茶飯事だからこそ、実力をつけておくべきというアドバイスがあることを充分かみしめておくべきであろう。日本で自信のない者ならカナダでも同じ、技術さえあればどうにでもやっつけていける等の意見もある。

言葉、技術を除くと、積極的にカナダ人と交際すること、確固たる目的をもって移住すること、カナダ事情を事前に十分調査してくる、失敗してもへこたれない忍耐と根性が必要等のアドバイスが多い。

確固たる目的をもって永住するとの意見は、移住の動機の中でもあこがれ型の者が多く、自己の体験あるいはあこがれ型の人が多く帰国するのを目にしたからであろう。ただ、漠然と行きたい、行けばなんとかなる式の移住希望者が多いことを嘆いているようである。移住するということは、困難と辛苦を供なうものであり、カナダに過度な期待を抱かない方がよいとする意見も多くみられる。

積極的にカナダ人と交際するとの意見は、言葉、習慣、人種等の異なるカナダにおいて、孤立しないよう、早くカナダ社会に同化することを願っているのであろう。これに関連し、日系人との交流は少ない方がよいとのアドバイスも少数みられる。

カナダ事情を、事前に調査研究してくるの延長では、一度移住前に自分の目でカナダを見てくること等もあるが、経費を無視できればこれなども一方法であろうが、旅行者の目と生活者の目とは、違いがあることを考慮しておく必要がある。

その他、少数ではあるが、資金を多く持ってくる、結婚してくる、移住前に海外旅行を試みる等のアドバイスもあった。

移住の可能性や将来性に関しては、カナダの経済状況が悪く、当分移住はしない方がよい、移住希望者は職種需要の状態を良く調査しておく必要があるのアドバイスを受けた。

これら全て（中には相反する意見もあるが）を兼ね備えることは、現実には困難であるが、郷に入れば郷に従えの精神面での戒めも多く、こうした種々の観点から貴重なアドバイスを提供していることを移住希望者は十二分に心に留め、準備、努力をすることが必要であろう。

35. 国際協力事業団への要望

最も多かった回答は無して45件、このうちには、事業団はカナダでは無力であり、要望はないという手厳しい意見もあった。

事業団の業務内容を知らないという回答も3件あったが、無しと回答した者の中には事業団の団体名、業務内容を知らない為に未記入者としたものも相当含まれていると予想する。その一方、僅かではあるが、非常に親切にされたという回答もあり、心強く感じた。要望のあったもので特に多かったのは、日本語学校への資金、資材面での援助と文化活動への資材購入、情報提供等である。子供を持つ多くの移住者は日語教育への必要性を感じており、この現状に鑑みて、近年は日本語教育のための援助、新移住者団体への補助など、金額的にはそれぞれ僅かであるが、在加日本人移住者の生活環境の整備に努めている。

これから僅かずつでも要望に応えることができればと考える。今回の回答者の多くは日本人移住者を継続的に多数送ってほしいとの要望も多く出ていた。

その他、様々な要望があったが、日本人移住者同志の会合を希望するものもある。

渡加後は、日本人移住者の横の繋がりが少なく、情報の交換、親睦の交流を求めていると思われるが、カナダの国土は広大であり、移住者もまた各地域に分散していることから、事業団の人員面からして、期待どおりには仲々実行が難しい面がある。しかしながら、日系人の多い地域には移住者の会を設け、各人が情報収集に努めているところもあり、積極的に参加してみること必要であろう。

B 独立自営者

独立自営者のみを対象としたのであるが、回答者が僅か4名に過ぎず、データ不足であり、傾向を述べることは極めて困難である。また設問は9項目を設定したが、未記載が多く、ここでの調査回答は、遺憾であるが差し控えることにしたい。

IV 調査結果の考察

1. 全体像

ケベック州邦人移住者（未記入者を除く割合）の平均的な人物を各回答から浮きぼりにすると次のようになる。

カナダでの滞在年数は5年以上になり、家族を持ち、日本国籍は離脱していない。入国当時言葉や就職、あるいは風俗習慣の違いで困ったが、カナダという国は渡航前に予想していたとおるかそれより良く、移住したことは間違いでなかったし、おそらくは永住することになるうと考えている。月収は\$800以上あり、支出は\$600以上である。資産は\$7,000以上を何らかの形で持っているが、負債も金額の違いはあれ半数のものがある。資金の現地調達には銀行融資を活用しており、借入れはそれほど難しくはなかったとしている。職場での英語になれるまでに6カ月程要したが、現在では日常生活で英語（仏語）の不自由を感じることは余りない。自分の子供には日本語教育も必要で将来、独立の計画のあるものは少ないことが窺える。日系人団体に加盟している者は、半分近いが、実際出席するものは少なく、他のグループにも殆んど参加していない。これからも、日本からカナダを志向する移住者が多数出てほしいが、日本人として恥かしく思われるような人にはカナダに来て欲しくないと多くの在加日本人移住者は述べている。

2. 前回のケベック州調査との比較

前回調査は1974年の後期に実施したものである。この時期はオイル危機に続き世界的不況はカナダにも影響を与え、失業率は最悪となり、カナダ政府では移住者受入れを、制限する方向にむかい、日本人移住者数は激減していた年である。こうしたことから回答者も前回の調査に比し、在加年数の浅い者の数は激減し、従って既婚者の割合が多いのが特徴である。

前回調査とアンケート用紙を変更したため、両者の比較は一部難しい面もあるが、永住希望、転職の度合、英語に対する慣れ、日語教育に対する考え方は、大差がない。渡航時の携行資金も増加の傾向にあり収入、支出の面では、賃上げやインフレが理由と思われるが、月収、生活費は、前回より着実に上昇している。アンケート用紙の変更から不明ではあるが、持家率、貯蓄額も増加していると予想する。

反面、仕事の満足度はかなり減っており、不満組が多くなった。

また、カナダ移住した感想、永住意志は「わからない」という回答が増えたのは、慎重派が増えたとも言えるし、最近の経済状況を反映して、先の見通しを楽観視してはいけないという自戒もあろう。

3. ブリティッシュ・コロンビア州（B・C州）との比較

数字的には付表を参照願いたい。

(1) 移住して良かったと述べている者の率ではB・C州に多いが、良かった、普通を合せるとケベック州に多い。

- (2) 永住の意志の強さではB・C州に多い。ケベック州では日本へ帰国すると回答した者が約7人に1人いる。
- (3) 現在の仕事に満足しているでは、ケベック州が多いが、満足している、普通ではB・C州が若干多い。
- (4) 収入で月に\$ 1,000以上あるものはB・C州に多い。
- (5) 転職状況は、転職なしがケベック州が断然多く、B・C州は少ない。転職回数は総じてB・C州に多い。
- (6) 1カ月の生活費は、\$ 801以上のものは、B・C州に多く、ケベック州が少ない。
- (7) 資産状況が、\$ 5,000以上のものはB・C州に多く、ケベック州に少ない。
- (8) 負債のある者は、ケベック州に少なく、B・C州に多い。
- (9) 英(仏)語で日常生活に不自由ないは、ケベック州に多く、B・C州が少ない。
- (10) 子供の日本語教育は、B・C州移住者の方に関心が高く、実際に日本語学校に通わせているものが多い。
- (11) 将来独立の計画を持っている者は、B・C州が比較的多く、ケベック州は少ない。

ブリティッシュ・コロンビア州(B・C州)移住者アンケート集計の比較

項 目	州 別		ケベック州(1978年調査)		B・C州(1977年調査)	
	男	女	男	女	男	女
1. カナダに移住して						
よ かつ た	51.1%	62.0%	67.1%	54.4%		
普 通	31.1	27.6	186	23.9		
まだわからない	15.6	6.9	12.9	21.7		
失 敗	2.2	—	0.7	—		
未 記 入	—	3.5	0.7	—		
2. カナダに定住しますか						
定 住 す る	37.8%	55.2%	57.9%	52.2%		
まだわからない	51.1	41.4	386	39.1		
他 国 へ 転 住	2.2	—	28	—		
日 本 へ 帰 国	8.9	3.4	0.7	6.5		
未 記 入	—	—	—	2.2		
3. カナダに帰化しますか						
帰 化 す る	31.1%	27.6%	46.5%	39.1%		
まだわからない	44.5	62.1	42.1	37.0		
帰 化 し な い	20.0	6.9	50	10.9		
未 記 入	4.4	3.4	6.4	13.0		

項 目	ケベック州 (1978年調査)		B・C州 (1977年調査)	
	男	女	男	女
4. カナダは期待どおりでしたか				
予想以上	15.6%	13.8%	12.8%	13.0%
予想どおり	55.5	41.4	59.3	52.2
予想以下	15.6	31.0	20.0	21.8
未記入	13.3	13.8	7.9	13.0
5. 渡航時の携行金は				
\$ 500 以下	42.2%	20.7%	29.3%	17.4%
\$ 501～1,000	11.1	27.6	25.7	28.3
\$ 1,001～2,000	28.9	31.0	25.7	21.7
\$ 2,001 以上	17.8	17.2	19.3	28.3
未記入	—	3.5	—	4.3
6. 入加当初最も困ったことは				
言葉	37.9%	42.8%	42.8%	44.3%
風俗習慣のちがひ	10.3	14.3	9.2	9.8
就職	12.1	8.6	17.3	13.1
住居	6.9	—	2.9	1.6
相談相手のないこと	6.9	22.9	6.4	8.2
低収入	8.6	2.9	9.3	6.6
その他	15.6	5.7	7.5	11.5
未記入	1.7	2.8	4.6	4.9
7. 最初の住居は				
日系団体の紹介	—	—	1.4%	4.3%
親戚知人の紹介	55.6%	51.7%	43.6	41.3
マンパワーセンターの紹介	6.7	—	8.6	4.3
ボランティア機関の紹介	2.2	—	1.4	2.2
新聞等の広告	8.9	10.3	27.9	17.4
業者	4.4	—	0.7	2.2
その他	22.2	34.5	15.7	21.8
未記入	—	3.5	0.7	6.5
8. カナダで最初の仕事につく までは				
渡航前に決定していた	62.3%	31.0%	30.0%	17.4%
2週間以内	8.9	3.5	29.3	10.9

項 目	ケベック州(1978年調査)		B・C州(1977年調査)	
	男	女	男	女
1 カ月以内	8.9%	6.9%	13.6%	15.2%
2 カ月以内	4.4	3.5	7.9	13.0
4 カ月以内	—	—	6.4	4.3
4 カ月以上	13.3	24.1	11.4	19.6
未 記 入	2.2	31.0	1.4	19.6
9. 最初の仕事はどのようにして見付けましたか				
知人、友人の紹介	37.8%	31.0%	40.7%	26.1%
日系団体ボランティアの紹介	—	—	3.6	2.2
新聞等の広告	15.6	13.8	11.4	17.4
直接電話や訪問	11.1	17.2	18.6	13.0
マンパワーセンターの紹介	8.8	3.5	12.9	6.5
私設職業あっせん所の紹介	—	3.5	1.4	—
旅 行 中	—	—	—	—
そ の 他	11.1	6.9	8.6	17.4
未 記 入	15.6	24.1	2.8	17.4
10. カナダでの転職状況は				
転 職 な し	48.9%	27.6%	17.9%	13.1%
1 ～ 3 回	31.1	24.1	42.1	30.4
4 ～ 5 回	6.7	—	20.0	15.2
6 回 以 上	2.2	3.5	5.7	2.2
未 記 入	11.1	44.8	14.3	39.1
11. 現在の仕事の満足度は				
満足している	42.2%	24.2%	37.1%	19.6%
普 通	35.6	31.0	45.0	23.9
不 満 である	22.2	13.8	13.6	21.7
未 記 入	—	31.0	4.3	34.8
12. 仕事の分野で日本と比較すると				
カナダの方が進歩している	11.1%	17.2%	13.5%	10.9%
同 程 度	40.0	17.2	29.1	8.7
遅 れ て いる	26.7	17.3	29.1	21.7
比 較 し え な い	22.2	13.8	23.4	30.4
未 記 入	—	34.5	4.9	28.3

項 目	州 別		ケベック州(1978年調査)		B・C州(1977年調査)	
	男	女	男	女	男	女
13. 現在の収入の月額は						
0または臨時収入	—	—	1.4%	87%		
\$ 400 以下	—	—	1.4	13.0		
\$ 401~\$ 700	2.2%	13.8%	3.6	26.1		
\$ 701~\$ 1,000	15.6	34.5	19.3	15.2		
\$ 1,001~\$ 1,200	13.3	13.8	22.2	17.4		
\$ 1,201 以上	62.2	13.8	50.0	4.4		
未 記 入	6.7	24.1	2.1	15.2		
14. 現在の1カ月の生活費は						
\$ 250 以下	—	—	1.4%	—		
\$ 251~\$ 400	2.2%	13.8%	1.4	87%		
\$ 401~\$ 500	4.4	13.8	6.4	10.9		
\$ 501~\$ 800	37.8	37.9	32.2	43.5		
\$ 801 以上	46.7	20.7	52.2	26.1		
未 記 入	8.9	13.8	6.4	10.8		
15. 現在の資産状況は						
\$ 500程度	4.4%	3.5%	1.5%	2.2%		
\$ 1,000程度	2.2	—	0.6	10.9		
\$ 2,000程度	6.7	13.8	7.2	6.5		
\$ 5,000程度	15.6	17.2	16.4	26.1		
\$ 10,000以上	57.8	31.0	60.0	32.6		
未 記 入	13.3	34.5	14.3	21.7		
16. 現在の負債状況は						
な し	22.2%	41.4%	14.3%	17.4%		
\$ 2,000 以下	15.6	—	10.7	21.7		
\$ 2,001~\$ 4,000	2.2	—	5.0	2.2		
\$ 4,001~\$ 6,000	4.4	—	5.0	—		
\$ 6,001 以上	35.6	10.3	47.9	26.1		
未 記 入	20.0	48.3	17.1	32.6		
17. 借入は容易でしたか						
非常に容易であった	37.8%	—	32.4%	30.5%		
容易であった	28.9	10.3%	25.4	15.2		
普 通	4.4	—	14.1	6.5		
困難であった	—	—	2.8	—		

項 目	州 別		ケベック州(1978年調査)		B・C州(1977年調査)	
	男	女	男	女	男	女
非常に困難であった 借りたことがない 未 記 入	— 11.1% 17.8	— 20.7% 690	2.8% 6.3 16.2	— 8.7% 39.1		
18 借入はどのような内容 でしたか						
銀 行	62.2%	10.3%	76.6%	44.9%		
日 系 団 体	—	—	—	—		
知 人・友 人	2.2	—	0.7	—		
そ の 他	6.7	—	3.6	8.2		
未 記 入	28.9	89.7	19.1	46.9		
19. カナダでの言語習熟法は						
マンパワーセンター 等の語学訓練	12.9%	13.9%	12.1%	10.9%		
学 校 に 通 学	22.2	47.2	32.7	30.9		
家 庭 教 師	1.9	2.8	2.4	3.6		
独 学	38.9	8.3	37.6	29.1		
そ の 他	22.2	22.2	11.5	18.2		
未 記 入	1.9	5.6	3.7	7.3		
20. 英語の不自由は感じますか						
ほとんど感じない	42.2%	41.4%	22.7%	28.6%		
日常生活に特に不自由はない	42.2	34.5	48.9	34.7		
不自由で勉強中	2.2	3.4	12.8	20.4		
不自由だが特に勉強 していない	11.2	17.3	13.5	16.3		
未 記 入	2.2	3.4	2.1	—		
21. 職場等で英語に慣れるまでは						
最 初 か ら	24.4%	13.8%	18.6%	15.2%		
3 カ 月 程 度	11.1	13.8	23.6	19.6		
6 カ 月 程 度	26.7	10.3	25.0	8.7		
1 カ 年 程 度	15.6	10.3	14.3	4.4		
2 カ 年 程 度	4.4	6.9	2.1	13.0		
3 カ 年 程 度	8.9	6.9	12.1	13.0		
未 記 入	8.9	38.0	4.3	26.1		
22. 子供の日語教育については A(子供を持っている方)						

項 目	ケベック州 (1978年調査)		B・C州 (1977年調査)	
	男	女	男	女
必要あり。日語学校に通わせている	18.5%	—	15.8%	11.1%
必要あるがまだ通わせていない	48.2	64.3%	55.8	55.6
必要ない。家庭教育でよい	25.9	28.6	24.2	11.1
全く必要ない	3.7	—	1.0	—
未 記 入	3.7	7.1	3.2	2.2
B (独身又は子供のいない夫婦の方)				
必要あり	83.3%	46.6%	66.7%	67.8%
必要ない。家庭教育でよい	—	40.0	11.1	17.9
必要ない。カナダの学校教育でよい	5.6	6.7	8.9	3.6
未 記 入	11.1	6.7	13.3	10.7
23. 子供の学校による日語教育				
学校、教師、教具教材とも普通程度ある	3.9%	—	9.2%	5.8%
学校が足りない	13.7	13.3	18.4	13.5
教師が足りない	15.7	6.7	9.9	9.6
教具・教材が足りない	11.8	3.3	11.2	11.5
そ の 他	13.7	10.0	11.8	19.2
未 記 入	41.2	66.7	39.5	40.4
24. 結婚の相手は				
日本から呼びたい	—	—	30.5%	—
当地の日本人を選びたい	33.3%	7.7%	4.3	22.2%
日系2世か3世を選びたい	—	—	—	—
日系以外から選びたい	—	7.7	—	11.1
人種民族を問わない	66.7	69.2	39.1	44.5
今のところ考えていない	—	—	17.4	22.2
未 記 入	—	15.4	8.7	—
25. 未婚の方で日本からの結婚相手は				
親族親戚を通じ	—	×	33.3%	×
知人・友人を通じ	—	×	25.0	×
移住関係者を通じ	—	×	—	×

項 目	州 別		B・C州(1977年調査)	
	ケベック州(1978年調査)		男	女
一時帰国して	—	×	25.0%	×
そ の 他	—	×	16.7	×
未 記 入	100.0%	×	—	×
26. 既婚の方で日本から夫人 と呼ばれた方は				
親戚知人を通じ	10.3%	×	3.3%	×
知人・友人を通じ	—	×	7.4	×
移住関係者を通じ	—	×	1.7	×
一時帰国して	5.1	×	7.4	×
日本在住時から	28.2	×	33.9	×
そ の 他	2.6	×	5.8	×
未 記 入	53.8	×	40.5	×
27. 結婚問題での阻害要因は				
対象者が少ない	31.1%	20.7%	35.3%	23.4%
対象者を捜す機会が少ない	15.6	17.3	20.7	23.4
仲介者がいない。または 少ない	2.2	3.4	5.3	2.1
経済的に困難	—	—	0.7	—
そ の 他	13.3	17.2	4.7	8.5
未 記 入	37.8	41.4	33.3	42.6
28. 新聞雑誌は主として何を 読みますか				
日本から定期的に購読し ている	4.8%	9.4%	10.1%	12.0%
日本の知り合いから送ら れる	8.1	3.1	8.0	5.2
日本語のものを店頭で購 入する	11.3	6.3	18.6	20.7
カナダの日語誌を購読	14.5	9.4	10.1	6.9
英字または仏字のもののみ	21.0	40.6	17.6	13.8
日語のもの英(仏)字の もの半々	37.1	25.0	31.9	36.2
未 記 入	3.2	6.2	3.7	5.2
29. 比較的親しい友人の数は				
日 本 人	32.1%	34.2%	28.9%	30.4%

項 目	ケベック州 (1978年調査)		B・C州 (1977年調査)	
	男	女	男	女
日 系 人	14.2%	24.2%	27.5%	27.2%
日 系 人 外	53.5	41.3	41.2	37.0
未 記 入	0.2	0.3	2.4	5.4
30.(1)日系人団体組織に加入していますか	(71.4%)	(28.6%)	(74.6%)	(25.4%)
会合ある都度	24.0	30.0	21.3	25.0
2回に1回程度	4.0	10.0	8.5	25.0
数回に1回程度	28.0	10.0	27.7	12.5
ほとんど出席しない	36.0	50.0	19.1	6.2
全く出席していない	8.0	—	23.4	31.3
未 記 入	—	—	—	—
(2)他のクラブ等に参加していますか	(60.8%)	(39.2%)	(75.3%)	(24.7%)
参加している	24.5	24.1	35.7	26.1
参加していない	53.3	58.6	45.7	47.8
未 記 入	22.2	17.3	18.6	26.1
31. 将来独立の計画は				
A あ る	22.2%	6.9%	40.0%	26.1%
農 業	—	—	(10.7)	—
工 業	—	(50.0)	(16.1)	—
商 業	(50.0)	—	(17.9)	(41.7)
サービス業	(40.0)	(50.0)	(46.4)	(58.3)
そ の 他	(10.0)	—	(8.9)	—
B な い	26.7	41.4	12.8	28.3
C わからない	40.0	34.5	23.6	23.9
未 記 入	11.1	17.2	23.6	21.7

JICA

LIB
F
2
8